

武田城下町遺跡Ⅲ

— 国立大学法人山梨大学職員宿舎建設工事に伴う発掘調査報告書 —

2009

国立大学法人山梨大学
甲府市教育委員会

序

本書は、甲府市大手一丁目地内におきまして、国立大学法人山梨大学の職員宿舎建設に先立ち実施いたしました武田城下町遺跡の発掘調査報告書であります。

県都としての本市の歴史は、永正16年（1519）に甲斐守護として国内を統一に導いた武田信虎が領国統治の新たな拠点として躑躅ヶ崎の地に館を構え、家臣団を住ませたことを契機に成立した城下町「甲斐府中」から始まっております。武田城下町遺跡は、甲斐府中と推定される地域を中世の城下町遺跡として登録しておりますが、現在の本市の発展過程を知る上で欠くことのできない遺跡であります。

このたび発掘調査の運びとなりました大手一丁目地点におきましては、溝跡で区画された屋敷地が確認され、その内側からは建物跡や井戸跡とともに当時の生活用品が多数出土いたしました。発掘調査によりまして、文字資料や古絵図などの記録では語られることのなかった名もない城下町の人々のくらしづくりを垣間見ることができましたことは、本市の成り立ちを考える上で大きな成果であります。

本書は、こうした貴重な調査成果を記録し、後世に引き継いでいくとともに、広く活用いただぐことを目的に刊行しておりますが、このたびの発掘調査にあたり、ご協力を賜りました国立大学法人山梨大学をはじめといします関係各位に心より感謝を申し上げますとともに、本市文化財保護行政の更なる推進に引き続きご助力をいただけますよう、お願い申し上げます。

平成21年3月

甲府市教育委員会

教育長 奥 田 理

例　　言

1. 本書は、山梨県甲府市大手一丁目4314番地内に所在する武田城下町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、国立大学法人山梨大学職員寮建設工事に伴うものであり、国立大学法人山梨大学との委託契約に基づき、甲府市教育委員会が実施した。
3. 調査経費は、試掘調査を甲府市教育委員会、本調査を国立大学法人山梨大学が負担した。
4. 試掘調査及び本調査は、佐々木満（文化振興課文化財主事）が担当した。
5. 発掘調査の期間及び面積は以下の通りである。
試掘調査 平成20年7月17日～平成20年7月29日 調査面積 約48m²
本調査 平成20年9月2日～平成20年10月30日 調査面積 約340m²
6. 本書の執筆は、佐々木満が行い、図化作業は栗田かず子・分部綾子・齊藤ひろみが行った。
7. 国土座標測量及び航空写真測量は、(株)シン技術コンサルに委託した。
8. 本書の編集は、望月秀人（文化振興課長）を責任者として佐々木満が行った。
9. 本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは甲府市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の機関及び諸氏から御指導・御協力を賜った。記して厚く感謝申し上げる。
国立大学法人山梨大学施設管理課・山梨県教育委員会学術文化財課・
(財)山梨文化財研究所・畠 大介
11. 発掘調査参加者
雨宮 小春 池谷富士子 金井いく代 川崎亜矢子 倉田 勝子 小池 幹子
坂本しのぶ 佐藤美喜男 末木 千並 渡辺百合子 若狭 宗晴

凡　　例

1. 発掘調査の測量においては、日本測地系X-36850.00・Y-5360.00を基軸として5mグリッドを設定している。
2. 本書に掲載した地図は、平成14年要部修正50万分の1地方図（4）関東甲信越、平成3年度甲府市都市計画図2500分の1・10000分の1を用いた。
3. 遺構断面土層の色調及び遺物観察表中の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2008後期）に基づいている。
4. 遺構・遺物の実測図縮尺は、基本的には溝跡1/80、掘立柱建物跡1/50、井戸跡・土坑1/40、出土遺物1/3であるが、陶磁器や石製品には例外もあるため、図中に示した各スケールを参照願いたい。
5. セクション図に表記されている水平線の数値は、海拔高度を表し、単位はmである。また、セクションポイント表記のE・W・S・Nは、東西南北を表し、同じ遺構で複数の断面観察を行っているところは、アルファベットで表記している。
6. 遺物実測図で反転復元したものについては、実測部分と復元部分の間にスペースを設けており、全体を反転復元したものについては、中央線部でスペースを設けて区別した。
7. 本書作成に際して引用・参考にした文献は、一括して本書第4章末尾に記載した。
8. 本書に使用した記号及びスクリーントーンは、以下のとおりである。

■ 煤

■ 熔融物

目 次

序

例 言・凡 例

目 次

挿図・挿表目次

第1章 武田城下町遺跡の概要	1
第1節 遺跡の立地環境と歴史	1
第2節 武田城下町遺跡の範囲	1
第3節 調査地点周辺の状況	4
第2章 調査の概要	6
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 試掘調査と基本層位	6
第3節 調査の方法	7
第4節 調査の経過	8
第5節 調査後の処置	8
第3章 遺構と遺物	10
第1節 溝 跡	10
第2節 井戸跡	17
第3節 土 坑	18
第4節 建物跡及び柱穴列	21
(1) 掘立柱建物跡	21
(2) 柱穴列・柱穴	25
第5節 遺構外出土遺物ほか	25
第4章 考 察	31
第1節 武田城下町遺跡の出土遺物の様相	31
第2節 武田城下町遺跡の遺構変遷	32
第5章 結 語	34

写真図版

付図：調査区全体図

挿図目次

図 1 武田城下町遺跡(大手一丁目地点)位置図	2
図 2 武田城下町遺跡と関連史跡分布図	2
図 3 城下町推定図	3
図 4 調査区位置図	5
図 5 試掘調査トレンチ配置図	7
図 6 調査区グリッド配置図	9
図 7 1～3号溝跡遺構図	11
図 8 4～7号溝跡遺構図	13
図 9 8～14号溝跡遺構図	14
図10 11・12号溝跡遺構図	16
図11 1～3号井戸跡、1・2号土坑遺構図	19
図12 3～10号土坑遺構図	22
図13 1号掘立柱建物跡・1号柱穴列遺構図	23
図14 Pit 1～42遺構図	24
図15 2～11号溝跡出土遺物	26
図16 12号溝跡、1・3号井戸跡、1・8・9・10号土坑出土遺物	27
図17 整地層・グリッド・調査区等出土遺物	28
図18 調査区屢数割り	33

挿表目次

出土遺物観察表	29
---------	----

写真図版

調査地点遠景	35
調査区全景	36
調査区近景	37
1～7号溝跡	38
5～14号溝跡	39
10・11号溝跡	40
12・13号溝跡、1号井戸跡	41
2・3号井戸跡、1・3号土坑	42
3～9号土坑	43
10号土坑、1号掘立柱建物跡、1号柱穴列、作業状況	44
出土遺物写真	45

第1章 武田城下町遺跡の概要

第1節 遺跡の立地環境と歴史

山梨県甲府市北麓を水源とする相川が形成した扇状地開析部に築かれた武田氏館周辺から扇状地扇端部にかけての広い範囲が武田城下町遺跡として周知されている（図1・2）。三方を山に囲まれた相川扇状地は、相川・藤川の両河川によって遮断された天然の要害であり、武田信虎によって築かれた要害山、湯村山城、一条小山砦により防禦される形となっている（図2）。武田城下町遺跡の立地環境を等高線から追ってみると、西側は相川に向かって急斜面が形成され、東も藤川に向かう緩斜面と河川間際に大きな断崖が形成されていることから、遺跡は扇状地上でも比較的安定した扇状地扇央部を中心に展開したと考えられる（図3）。

中世遺跡としての武田城下町遺跡の歴史は、永正16年（1519）に甲斐守護武田信虎による武田氏館（通称躑躅ヶ崎館）造営から始まる。信虎は甲斐守護の座を狙う親族衆と各地域に割拠した有力国人衆を屈服させて甲斐国内を平定し、甲府市東部に位置する川田館から相川扇状地開析部の躑躅ヶ崎の地に館を移転させた。同時に家臣団の集住を強制したことが記録されており、甲斐国を統一に導いた信虎による武田氏館造営を契機に成立した中世城下町「甲斐府中（甲府）」が武田城下町遺跡である。

やがて信玄・勝頼による勢力拡大とともに、中部一帯に広がった武田領国の政治、経済、文化の中心として繁栄した。記録の上でも重臣甘利氏を始め、諫訪を追われた下社の金刺氏も早い段階から武田氏を頼って城下町内に屋敷を構えている。『高白齋記』によると、天文17年（1548）には地下人による城下への田畠や新屋敷造成の制限が出されており、城下町建設に対して武田氏が何らかの形で統制を行うまでになっていたと考えられる。

信玄の跡を継いだ勝頼は、天正9年（1581）に真田昌幸らに命じて菲崎の七里岩台地上に新府城を築城し、本拠を移転した。信虎と同様、家臣団屋敷を含む府中移転も計画されていたと想像されるが、実際に城下町移転がどこまで実行されたかは定かではない。しかし、移転後間もない天正10年（1582）には織田信長・徳川家康の連合軍による侵攻を受け、ほどなくして武田氏は滅亡する。新たな領主たちは新府ではなく再び甲府を統治拠点と定めたことからも、依然として相川扇状地上に成立した甲斐府中は健在であったと思われる。

甲斐の領国經營を任せられた徳川氏・豊臣氏家臣団は、躑躅ヶ崎の武田氏館跡に改修を加え、領国統治の拠点としたことが武田氏館跡の発掘調査等で明らかになりつつあるが、やがて扇状地南端部の独立丘陵である一条小山に近世城郭である甲府城を築城した。甲府城築城に伴い府中城は移転することとなり、城下町でも武田氏館跡近郊は農村化し、甲府城に近い南部一帯は甲府城三ノ堀内に組み込まれ、近世城下町の一部として再編成された。

第2節 武田城下町遺跡の範囲

戦国期には武田氏館を中心として多くの家臣屋敷や商工人屋敷、神社・仏閣が集まっていたと想定されている。それを裏付けるかのように館跡隣接地には「道軒屋敷」（武田道通軒信綱）、「土屋」（土屋右衛門尉正次）、「天久」（武田典厩信繁あるいは信豊）などの字名が残り、重臣屋敷が取り囲んでいたと考えられ、発掘調査によても戦国期の遺構・遺物が多数検出されている。その他にも西側には「古八幡」（府中八幡社）の字名が残り、館

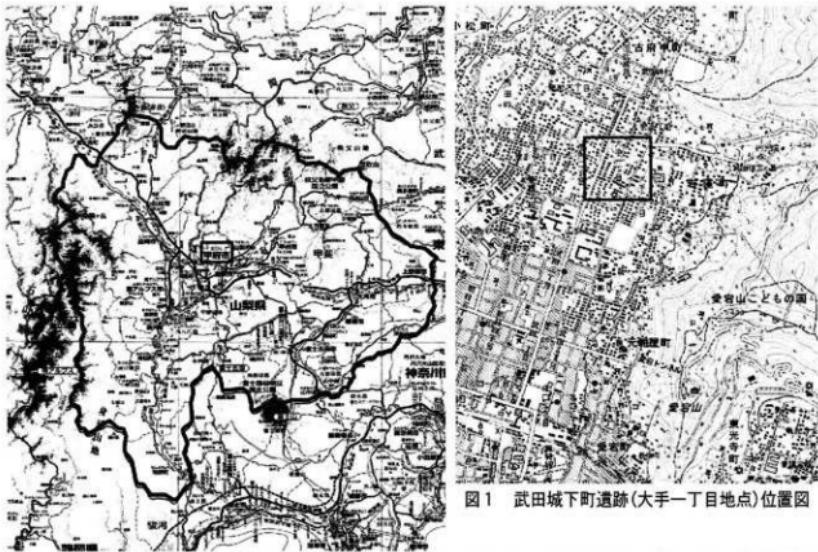


図1 武田城下町遺跡(大手一丁目地点)位置図

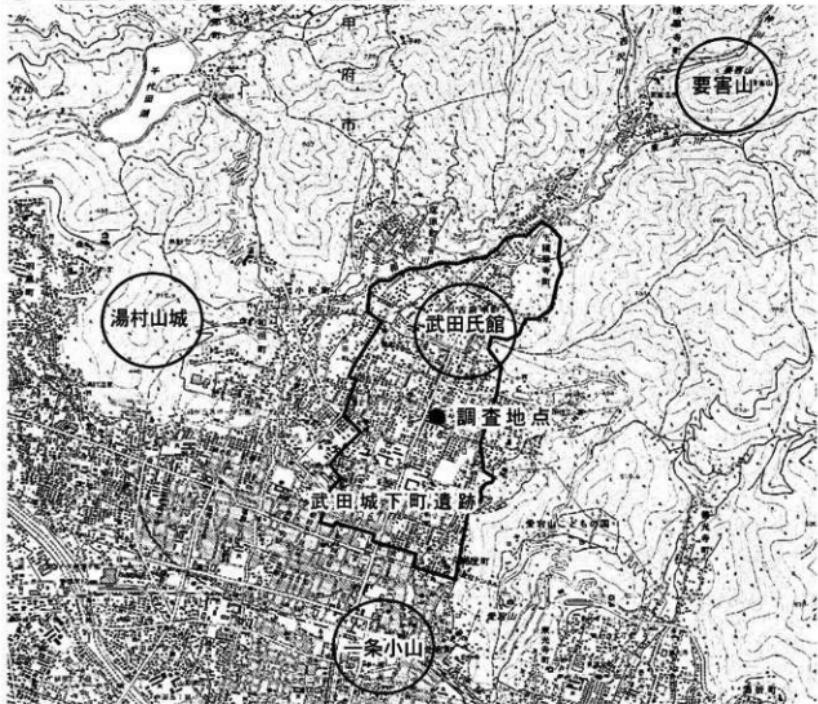


図2 武田城下町遺跡と関連史跡分布図



図3 城下町推定図

跡東端に位置する「三角」やその南の「鍛冶小路」における発掘調査では、鍛冶工人が使用したとみられる鉄滓や熔融物付着土器等が多数出土していることから、鍛冶工人の居住域と推定されるなど、館の近くであっても様々な階層の屋敷群が混在した城下町であったと考えられる（図3）。

武田城下町遺跡の範囲は、江戸期に描かれた城下町に関わる古絵図、あるいは小字名などを参考にして包蔵地としている。古い地割りや伝承が残る相川上流の上積翠寺付近を北限とし、東西は、相川と藤川に挟まれた扇状地扇尖部に武田氏館から南北方向に整備されたと考えられる5本の基軸街路周辺を城下町の推定域としている。

南限については、武田氏時代には三日市場と八日市場が南端に開かれていたことが明らかになっている。三日市場は近世城下町の中にも元三日町として名称が残されているため所在が明らかであるが、八日市場については近世甲府城下町に組み込まれたと考えられ、明確な場所の特定はされておらず、愛宕山南麓付近と推定されている。いずれにしても中世城下町南端の多くは近世城下町に再編成されたため不明な点が多いのが現状である。しかしながら、甲府城北側に位置する近世城下町の中には旧町名に「古」・「元」を冠するものが多く確認されており、そのような場所については、中世段階の城下町の名残である可能性が高いと判断している。発掘調査によっても、現在のJR甲府駅北口周辺まで16世紀段階の遺構・遺物が検出されることから、城下町は武田氏館跡周辺から南は一条小山の麓に移されたとされる一蓮寺周辺にまで及んでいたものと考えられる。

しかし、遺跡として取り扱うに際しては、中世と近世の二つの城下町遺跡を便宜的に区別する必要があり、武田氏館を中心とした中世の城下町を武田城下町遺跡、甲府城を中心とした近世の城下町を甲府城下町遺跡と呼称している。そのため、二つの城下町が重複する甲府市北口から武田、朝日…帯の取り扱いは、甲府城跡三ノ堀を一つの境界として設定し、堀の外側を武田城下町遺跡、堀の内側を甲府城下町遺跡としている。

第3節 調査地点周辺の状況

本地点が位置する大手一丁目付近では、これまでに各種開発に先立つ試掘調査等も含めて発掘調査実績は少なかったが、平成13年度に本地点から200mほど南側で武田城下町遺跡大手一丁目（甲府井林署跡）地点（図4）が発掘調査されている（甲府市教育委員会2001）。宅地造成に伴う調査によって16世紀中葉から16世紀後半の城下町に関する遺構群が発見されており、屋敷区画として用いられた溝跡や掘立柱建物跡、墓跡などが検出されている。堀跡と推測される大型の溝跡が隣地境界に近い調査区南側から発見されており、城下町における区画のあり方を考える上で貴重な資料を得ることができた。また、溝跡からは17世紀初頭の陶磁器なども出土しており、中世の溝跡が近世初頭まで利用されるとともに、屋敷地の区画は現在まで引き継がれたことが明らかとなった。

かつて城下町が展開していた扇状地一帯は、近世に入ると多くが水田として開発されたこともあり、水田造成層を除去するとともに中世段階の遺構面が確認される事例が多い。そのため、水田造成時に削平を受けて地山だけが確認される場所もあれば、包含層が残り、遺構面が良好な状態で確認される場所もある。このような結果は、かつての城下町の区画内に存在した高低差が水田開発によって切り盛りされた結果と考えられ、相川扇状地の傾斜地を利用して形成された城下町像が少しづつ浮き彫りになりつつある。

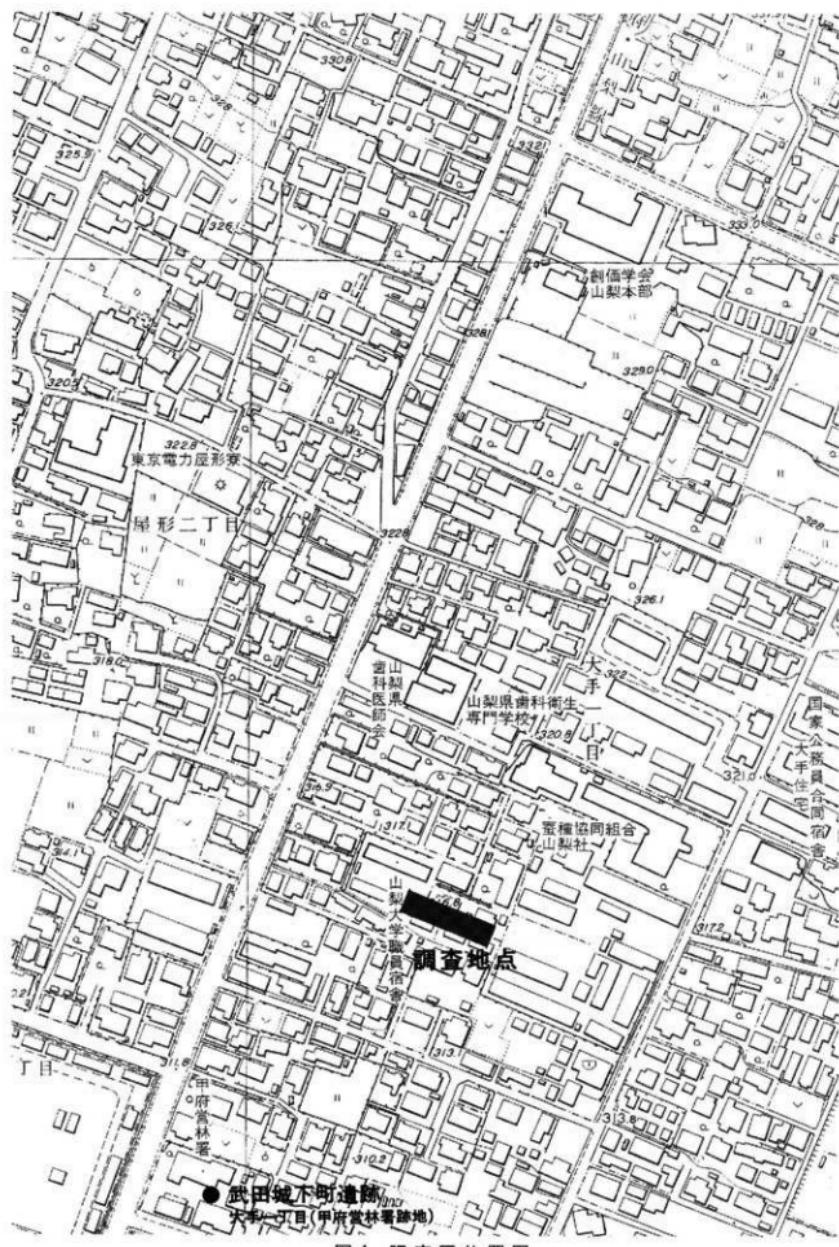


図4 調査区位置図

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

周知の埋蔵文化財包蔵地である武田城下町遺跡範囲内において、国立大学法人山梨大学職員寮建設工事に先立ち、平成20年5月1日付けで国立大学法人山梨大学学長貫井英明より文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届山が提出された。

届出を受けて、甲府市教育委員会と国立大学法人山梨大学（以下、山梨大学という）との間で協議を行い、甲府市教育委員会が平成20年7月17日から7月29日までの期間において、遺跡の有無や時代、範囲、内容などを確認するための試掘調査を実施した。試掘調査に関わる費用は、甲府市教育委員会が国庫補助事業費で対応した。

試掘調査の結果、中世城下町に関する遺構・遺物が検出されたため、山梨大学側と協議を行い、発掘調査及びその後の整理作業を含めた本報告書作成費用は原因者側の負担とすることで合意し、平成20年8月25日付けで委託契約を締結した。

発掘調査範囲は、建物建設予定地において遺跡確認面に掘削が及ぶ範囲一帯を調査対象地とし、平成20年9月2日から現地での発掘調査に着手し、平成20年10月30日には現地を埋め戻して調査を終了した。

第2節 試掘調査と基本層序

本地点については、調査直前まで木造建物などが数棟存在していたものの、大きな建造物ではなく、地下の状況は比較的良好ではないかと考えられた。試掘調査は、新築建物建設予定地を中心とした範囲内に絞り込み、調査区の設定を行ったが、調査対象地は東西方向に長い敷地であり、新築建物も同方向に長軸を有するため、建設予定地のうち東南隅付近を基点として東西方向に約27m、幅2mでトレンチを設定した（図5）。

試掘調査に際しては、開発計画に伴う建物解体作業に従事していた重機に協力いただき、トレンチを掘削した。重機によって表土を除去した後、人力による確認作業を実施したが、現地表下約50mから溝跡と考えられる帶状の遺構と、その周囲から戦国時代の上器や陶磁器などの破片が出土した。よって、本地点に中世城下町に関する遺構・遺物が包蔵されていることが判明したため、少なくとも建物建設に伴う造成によって失われる可能性がある範囲内を発掘調査する必要があると判断した。

基本層序は、現地表で宅地造成及び建物解体時の盛土が約30cmあり、その下層にはやや締まりのない暗褐色土が約20cm確認されたが、おそらく宅地造成以前に存在した畑耕作土と考えられる。この畑の耕作土は、調査区西側では下層に5cmほどの黄褐色の水田床土を伴う場所もあり、かつては水田だったようである。畑の耕作土を除去すると砂粒や炭化物等を多く含むやや暗い暗褐色土層が検出された。暗褐色土層からは中世のかわらけや瀬戸美濃などの陶磁器片が得られたことから、包含層と判断した。

ただし、トレンチ南側では後に敷地造成層と判明した黄褐色土層や灰土層などがあり、土層自体はトレンチ内でも一定ではなく、予想以上に複雑な堆積状況であった。そのため、不確定ながらも調査範囲の中で面積の大部分で確認された暗褐色土層面を中世城下町の包含層、あるいは遺構面と判断して調査することとした。

第3節 調査の方法

本調査対象面積は約340m²であり、大型重機によって一度に掘削を行った。基本的に現地表から暗褐色土層までを重機による掘削とし、搅乱と南側の敷地造成層の一部を除きそれ以下をすべて人力により掘削した。

発掘調査に際しては、国土座標に合わせた方眼測量によって5m×5mグリッドを基本単位として設定し、東西列を算用数字、南北列をアルファベットで表記したものを組み合わせてグリッド番号として用いた。各グリッド番号は南東隅にあたる杭を基準とし、遺構実測、遺物取り上げ等に際しては、すべてグリッド番号に合わせて記録した（図6）。

遺構の調査方法は、柱穴・土坑・井戸跡などは基本的に半截した上で遺構であるか判断し、写真・図面により記録した。溝跡など大型の遺構については部分的に土層観察面を設け、写真・図面により記録した。個々の調査がある程度完了したところで、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量により調査区全体を写真撮影し、図化した。

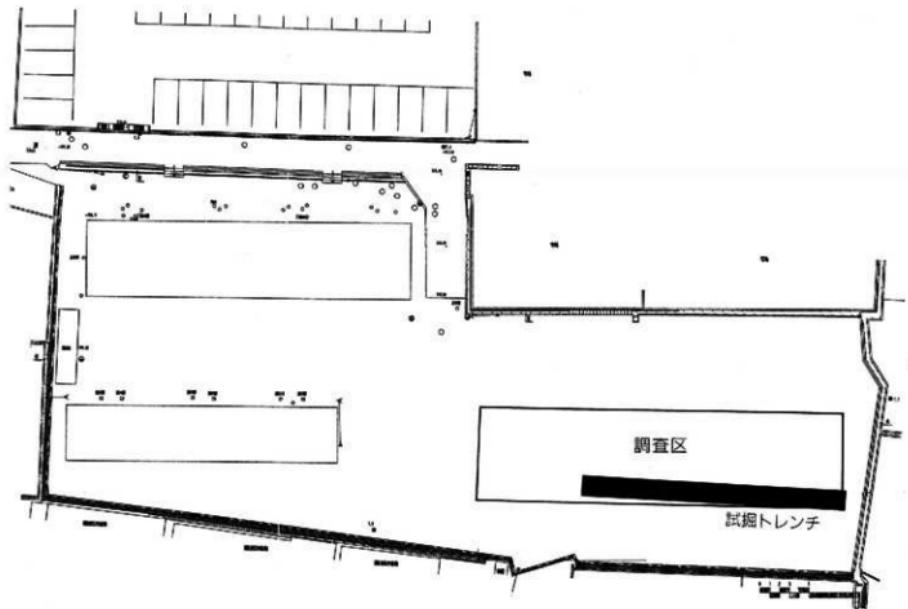


図5 試掘調査トレンチ配置図

第4節 調査の経過

発掘調査は、範囲確認に伴う試掘調査を平成20年7月17日から29日までの期間において6日間実施し、本調査を平成20年9月2日から10月30日までの期間内で35日間実施している。本調査の主な作業の進捗状況は以下のとおりである。

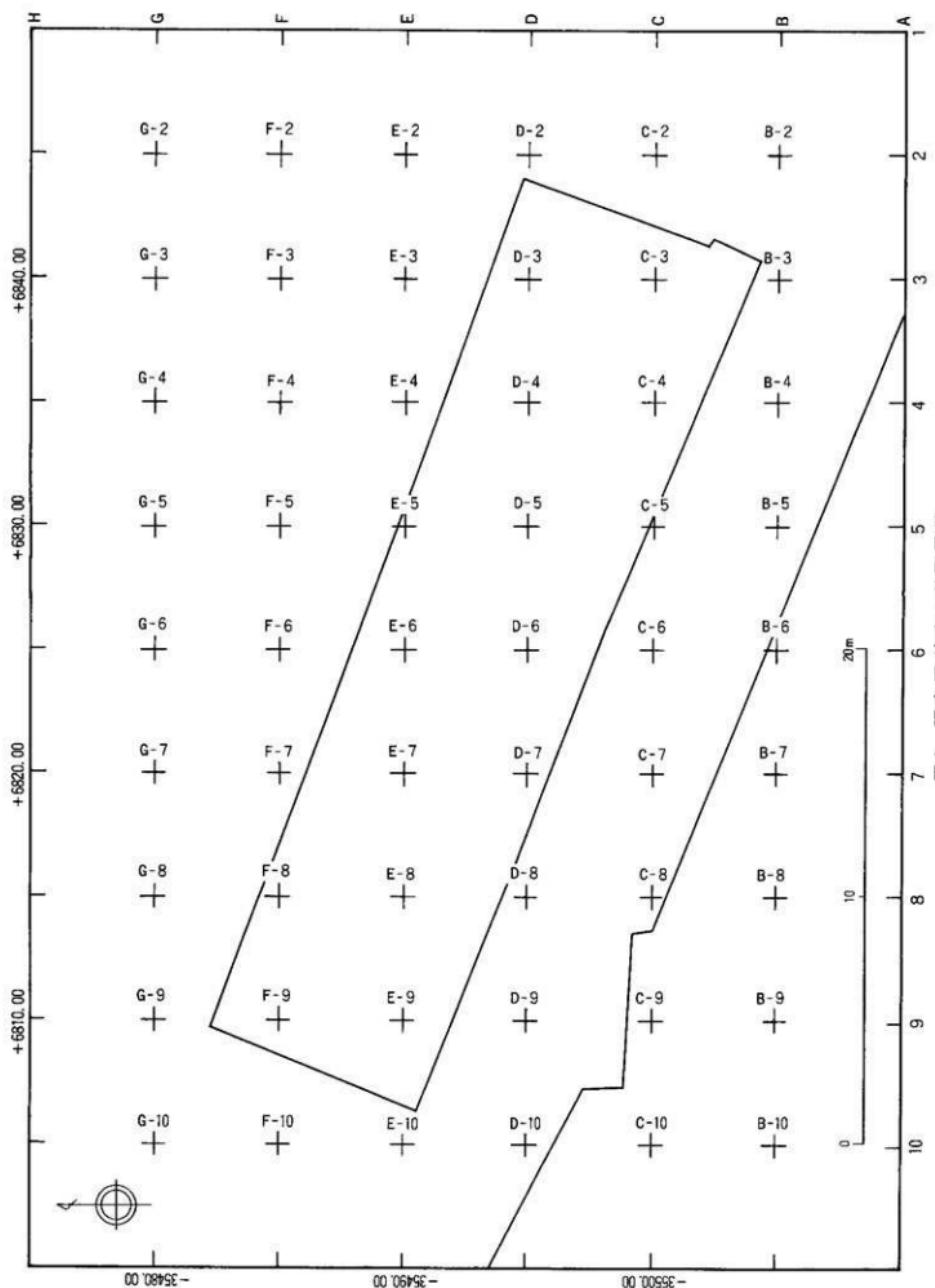
- 9月2日 調査範囲設定。重機により調査区掘削。人力により隨時掘削・精査。
9月10日 調査区内の方眼測量と杭打ち実施。
9月12日 1号溝跡掘削着手。
9月13日 調査区内国上座標杭打ち。
9月17日 1～4号Pit掘削着手。
9月24日 5・6号Pit掘削着手。
9月25日 2号溝跡・7～11号Pit掘削着手。
9月30日 3号溝跡・1～3号土坑・12号Pit掘削着手。
10月1日 5号溝跡掘削着手。
10月2日 1号井戸跡・4号土坑・13号Pit掘削着手。
10月3日 5号土坑・14～22号Pit掘削着手。
10月7日 4・6・7号溝跡・6号土坑掘削着手。
10月10日 8号土坑・23～25号Pit掘削着手。
10月14日 重機により調査区南側の造成層上面掘削。26号Pit掘削着手。
10月15日 9・10号溝跡・27号Pit掘削着手。
10月16日 8・11号溝跡・2号井戸跡掘削着手。
10月20日 9号土坑掘削着手。
10月21日 12号溝跡・10号土坑・18号Pit掘削着手。
10月22日 13・14号溝跡・3号井戸跡・29～31号Pit掘削着手。
10月23日 7号土坑・32・33号Pit掘削着手。空中写真測量実施。
10月27日 最終確認により発見された34～40号Pit掘削着手。
10月29日 重機による埋め戻し開始。
10月30日 全体を整地し、発掘調査完了。

第5節 調査後の処置

発掘調査によって得られたコンテナ2箱分の出土遺物は、平成20年11月10日付けで甲府警察署長宛に遺失物法に基づく埋蔵物発見届を提出するとともに、山梨県教育委員会教育長へ保管証を出し、平成20年12月3日付け教学文第2223号により文化財と認定された。合わせて、発掘調査成果については、本書に先駆けて概要報告書をまとめ、平成20年11月18日付け教発第10203号で山梨大学に提出した。

室内整理作業及び報告書作成作業については、甲府市山宮甲文館において出土遺物の洗浄、注記、接合後に実測作業を行なった。図化した実測図を清書するとともに遺物の写真を撮影し、図版作成を行っている。現場での実測図や記録写真等についても整理するとともに、図版作成を行い本書の刊行に至っている。

図6 調査区グリッド配置図



第3章 遺構と遺物

今回実施された発掘調査区内からは、溝跡14、井戸跡3、土坑10、柱穴42（うち建物跡1・柱穴列1）が検出された。主な遺構の時期は、概ね16世紀中葉以降と考えられ、武田氏時代の城下町関連の遺構群と位置付けられる。

第1節 溝跡

1号溝跡（遺構：図7 遺物：掲載なし）

位置：D-9、E-9グリッド

検出状況：南北方向に延びる溝跡であり、南側には西に面を有する石積みを伴っていた。

検出範囲内では全長約6.2m、幅約1.6mで北側は浅く、南側へ向かって傾斜していた。深さは南側が約0.3mであった。出土遺物の中に小片ながら近世陶磁器が確認されたため、近世遺構と考えられる。

重複関係：11号溝跡より新しい。

出土遺物：かわらけ、近世の鉄釉陶器碗片が微量出土していることから、17世紀以降の溝跡と考えられる。

2号溝跡（遺構：図7 遺物：図15）

位置：B-2・3、C-3～5、D-5・6グリッド

検出状況：調査区の形に合わせて東西方向に延びる溝跡であり、検出範囲では全長北東から南西方向に延びる溝跡で、検出範囲内では全長約21.6mで、西側は8号溝跡と接する。幅は約1.3m～1.8mで、確認面から深さ約0.2mである。ちょうど屋敷地の境界となる緩い段差付近にそれと並行して掘削されていることから、屋敷地の境界を意識したものではないかと考えられる。堆積上下層に砂層などではなく、水が流れていた開渠の溝ではなく、不整形なU字形の断面であったことから、生垣などの可能性も考えられる。

重複関係：4・8号土坑より古く、8号溝跡との重複関係は確定であった。

出土遺物：1・2はかわらけの小皿であり、3は青磁稜花皿である。青磁は15世紀代のものが継続して使用されていたと考えられ、溝跡の年代は16世紀中葉と考えられる。

3号溝跡（遺構：図7 遺物：掲載なし）

位置：D-8・E-8グリッド

検出状況：南北方向に延びる溝跡であり、南側は搅乱によって失われていた。検出範囲内では全長約2.2m、幅約0.5mで、深さは約0.05mと非常に浅く、性格は不明である。

重複関係：11号溝跡より新しい。

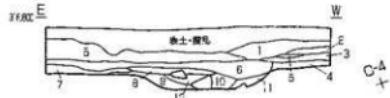
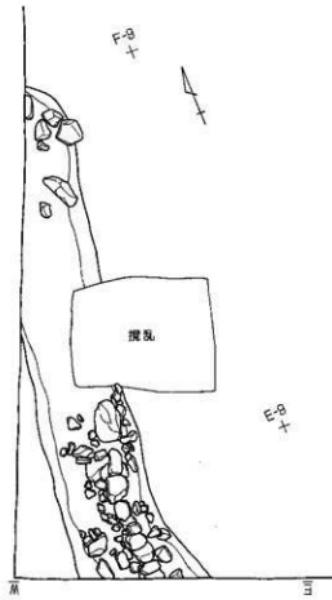
出土遺物：かわらけが微量出土しており、年代的には16世紀代の遺構と考えられる。

4号溝跡（遺構：図8 遺物：図15）

位置：D-8、E-8グリッド

検出状況：D-8グリッドとE-8グリッドで同規模の溝跡が検出され、土層堆積状況から同一遺構ではないかと考えられた。よって、接続部付近が搅乱されているため

1号溝跡

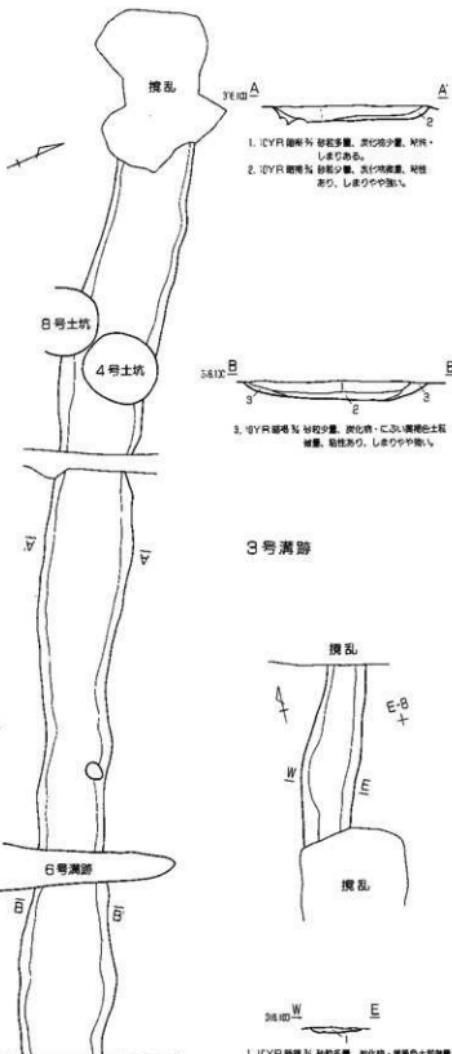


1. BYP 帯帶 5: 砂少、炭化物微量、粘性・しまりある。
2. BYP 帶帶 5: 砂少、炭化物微量、粘性・しまりやや多い。(水成土)
3. BYP 帶帶 5: 砂少、炭化物微量、粘性・しまりやや多い。
4. BYP 帶帶 5: 砂少、炭化物微量、粘性・しまりやや多い。
5. BYP 帶帶 5: 砂少、炭化物微量、粘性・しまりやや多い。
6. BYP 帶帶 5: 砂少、炭化物微量、粘性・しまりある。
7. CYR 2-3: 黄褐色土多量、(炭・炭化物微量、透二透無量、粘性あり、しまりやや多い)。
8. BYP 帶帶 5: 砂少、炭化物微量、粘性・しまりある。
9. BYP 帶帶 5: 砂少、炭化物微量、粘性・しまりやや多い。
10. BYP 帶帶 5: 砂少多量、炭化物少量、小砂微量、粘性・しまりある。
11. BYP 帶帶 5: 砂少多量、小砂微量、粘性・しまりある。

0 1-3号溝跡 2m

(2) 2号溝跡剖面
2号溝跡平面図 2m

2号溝跡



1. CYR 帶帶 5: 砂少多量、炭化物少量、粘性・しまりある。
2. CYR 帶帶 5: 砂少少量、炭化物微量、粘性・しまりやや多い。

3. CYR 帶帶 5: 砂少少量、炭化物・黄褐色土相共量、粘性あり、しまりやや多い。

3号溝跡



1. CYR 帶帶 5: 砂少多量、炭化物・黄褐色土相共量、粘性やや弱く、しまりある。

図7 1～3号溝跡遺構図

に不確定ではあるが、直角に曲がる溝跡と考えられる。検出範囲内では長さが南北軸で約4.2m、東西軸で約2.1mであった。幅は約0.4mで、深さは約0.05mと浅い溝跡であった。

重複関係：2号土坑より古い。

出土遺物：かわらけが微量出土しており、16世紀代の遺構と考えられる。

5号溝跡（遺構：図8 遺物：なし）

位置：B - 3・4、C - 4グリッド

検出状況：B - 3グリッドからC - 4グリッド方向に大きく湾曲しながら延びる溝跡で、検出範囲内では長さが東西軸約8.5m、南北軸約1.5mで調査区外へ延びる。幅は約0.4mで、深さは約0.05mと浅い溝跡であったが、全体的に粗粒砂層が堆積していたことから、水が流れていたと考えられる。性格や年代などは不明である。

重複関係：6号溝跡、10号土坑より新しい。

出土遺物：なし。

6号溝跡（遺構：図8 遺物：掲載なし）

位置：B - 3、C - 3グリッド

検出状況：南北方向に延びるが、北側は削平を受けたことによって途切れおり、調査区中央から南側だけが検出された。検出範囲内では全長約5.6m、幅約0.5～1.0mであり、深さは南側の深い場所で約0.15mであった。

重複関係：2号溝跡より新しい。

出土遺物：かわらけが微量出土しており、年代的には16世紀代の遺構と考えられる。

7号溝跡（遺構：図8 遺物：掲載なし）

位置：C - 6、D - 7・8グリッド

検出状況：グリッド内を「コ」の字状に湾曲しながら延びる溝跡であり、湾曲部はそのまま調査区南壁外へ展開すると考えられる。西側の隅が搅乱によって失われているものの、検出範囲内における長さは、東西軸で約6.9m、南北軸では東側が約1.1m、西側が約1.45mであった。幅は約0.65mであり、深さは0.1m前後であった。堆積上は下層が粗粒砂層となっており、水が流れていたと考えられる。

重複関係：8・10・12溝跡、7号土坑より新しい。

出土遺物：かわらけなどが微量出土しており、1点近世染付碗が出土している。年代的には18世紀代の遺構と考えられる。

8号溝跡（遺構：図9 遺物：図15）

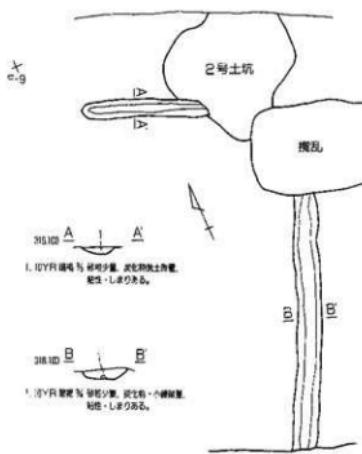
位置：C - 6、D - 6、E - 6グリッド

検出状況：調査区中央付近を南北に継断する溝跡であり、検出範囲内では全長約9.3m、幅約1.0m、北側が削平された状態であったが、深さは北側で0.2m、南側では0.4mであった。北側の底面は浅く広く、南側に向って深く狭くなっていた。底面には砂層の堆積はなく、恒常に水が流れている溝ではなく、敷地境界のような性格の区画溝であったと考えられる。

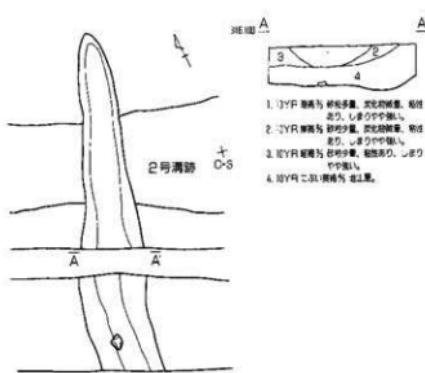
重複関係：7・9号溝跡より古く、14号溝跡より新しい。

出土遺物：かわらけや土器擂鉢などが少量出土しており、掲載した5～8はかわらけである。遺構の年代は16世紀中葉と考えられる。

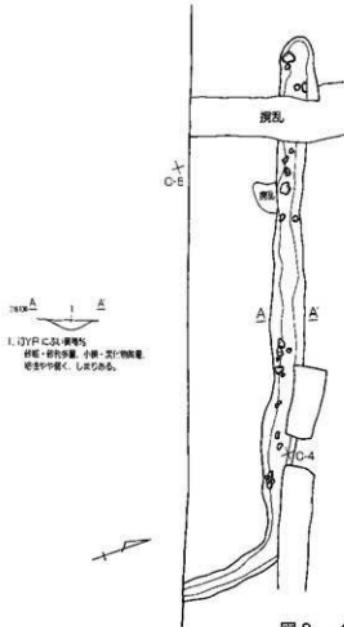
4号溝跡



6号溝跡



5号溝跡



7号溝跡

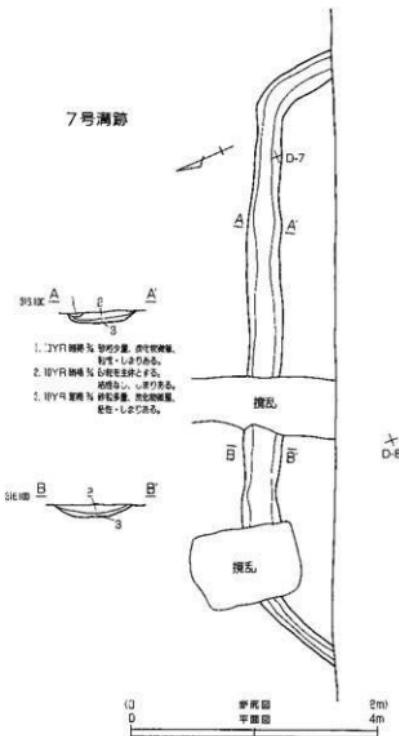
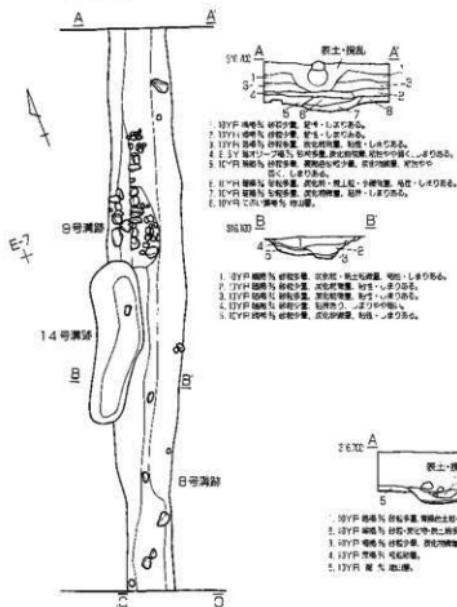
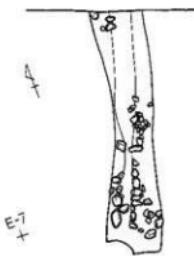


図8 4～7号溝跡遺構図

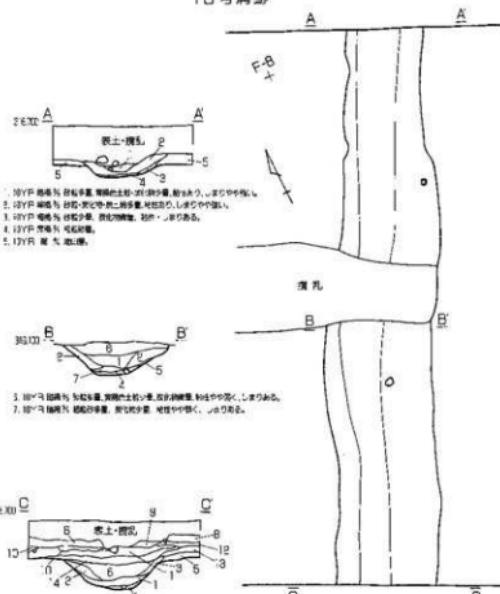
8号・14号溝跡



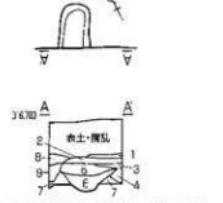
9号溝跡



10号溝跡



13号溝跡



1. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), 厚さ-1.5mある。
2. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
3. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
4. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
5. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
6. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
7. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
8. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
9. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
10. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
11. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
12. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。
13. 表土・腐泥層 (Soil-Crust Layer), 黄褐色 (Yellowish Brown), 腐泥 (Muck), しらべりあり。

図9 8～14号溝跡遺構図

9号溝跡（遺構：図9 遺物：なし）

位置：D - 6、E - 6グリッド

検出状況：8号溝跡北側と重複する位置で検出された小礫を並べた石組の溝跡であり、全体的に削平されたとみられ、北側の石組や南側の延長は確認することはできなかった。検出範囲内では、素掘り部分の全長は約4.0m、幅0.8mであり、石組水路部分は長さ約1.4m、幅0.15mであった。深さは約0.05m前後であり、浅い溝跡であったが、時期などは定かではない。

重複関係：8・14号溝跡より新しい。

出土遺物：なし。

10号溝跡（遺構：図9 遺物：図15）

位置：D - 8、E - 7・8グリッド

検出状況：調査区を南北方向に継断する溝跡であり、D - 8グリッドでは西側から11号溝跡が接続していた。検出範囲内では全長約9.2m、幅1.3～1.6mである。北側は削平されており、深さは北側が0.25m、南側は0.52mであった。

土層観察では焼土塊や炭化物を多量に含む層が東側から流れ込むように堆積していることが確認された。焼土塊自体は、建物の土壁というには壁体の部材痕や表面と思われる部位は確認されず、全体的に半焼けの柔らかい塊が目立った。したがって、火災処理か竈や炉体の解体などによって廃棄されたものと考えられるが、後者の可能性の方が高いように感じた。同様の堆積層は11号溝跡や30・31号ピットでも確認されたことから、これらの遺構群は同時期に存在した遺構であると考えられる。溝跡底面は北から南へ傾斜しており、粗粒砂層が堆積していたことから、一定量の水が流れていたことが明らかとなった。

重複関係：11号溝跡、30・31号ピットと同時期。

出土遺物：かわらけや土器擂鉢、火鉢、内耳鍋などが少量出土している。掲載遺物は9～13はかわらけで、11・12には熔融物が付着していた。14は片口擂鉢、15は石鉢、16は青花皿であったが、いずれも16世紀中葉の遺物と考えられる。

11号溝跡（遺構：図10 遺物：図15）

位置：D - 8・9グリッド、E - 8・9グリッド

検出状況：10号溝跡と垂直に交わるように東西方向に延びる溝跡であり、接続部には溝内側に面を揃えた石組が施されていた。溝跡西側は、そのまま調査区外へ延びるとともに、南側にも1号溝跡と重複するように展開していた。検出範囲内では全長約7.0m、幅1.5mであり、深さは約0.3mであった。溝跡の東西方向に関しては、10号溝跡接続部ばかりではなく、水路内側に面を有する石材が所々に残されていたことから、本来は石組の水路であったと考えられ、廃棄時に石が抜き取られたことが明らかとなった。

溝跡中位にはE - 9グリッドを中心に10号溝跡で認められたものと同じ焼土塊を多量に含む埋土が検出されたが、溝跡全体で確認されたものではなく、部分的に集中して検出されたことから、何らかの理由で人為的に廃棄されたものと考えられる。溝跡底面には粗粒砂層が堆積し、西から東へ下っていたことから、10号溝跡側へ水が流れていると考えられる。

重複関係：1・3・4号溝跡より古く、10号溝跡と同時期。

出土遺物：掲載遺物は17～23であり、23の土器擂鉢以外はかわらけである。図化できな

かつたものの、かわらけの中には熔けた金属が付着したかわらけ（熔融物付着器）が1点出土している。それ以外の出土遺物としては、青磁や砥石が各1点出土している。青磁は稜花皿であり、表面には火災など二次的な被熱による発砲がみられた。

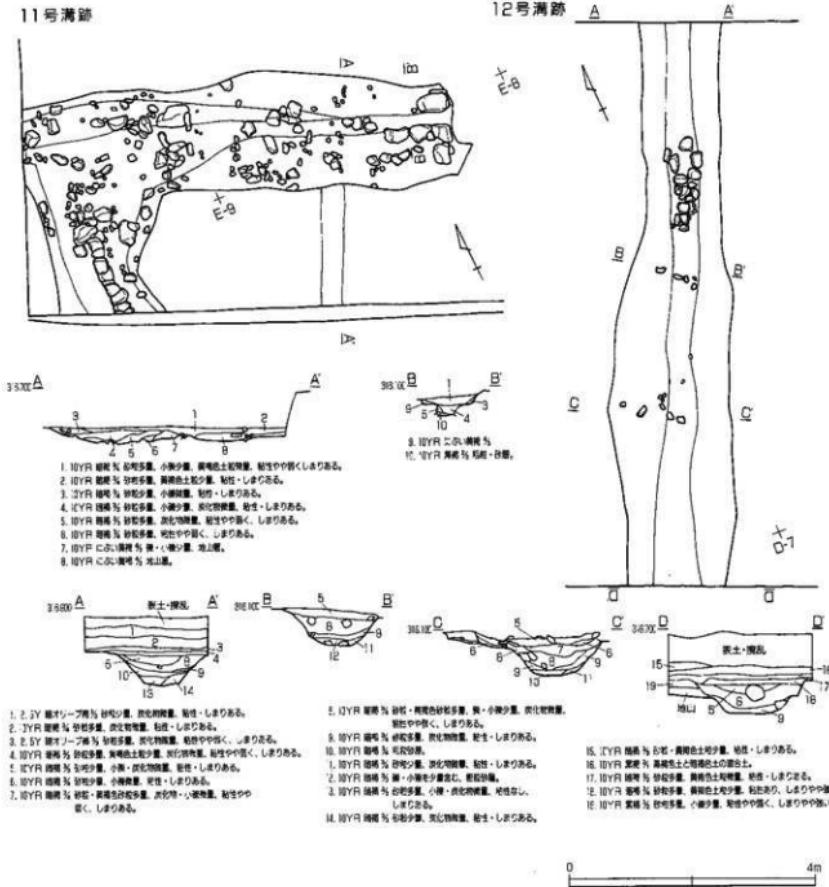


図10 11・12号溝跡遺構図

12号溝跡（遺構：図10 遺物：16）

位置：D - 6・7、E - 6・7グリッド

検出状況：8号溝跡と並行するように調査区を南北方向に継続する溝跡であり、規模は検山範囲内で全長約9.2m、幅約1.3~2.0m、深さは北側で約0.5m、南側で約0.6mであり、南へ向かって傾斜していた。調査区壁面も含め4箇所で断面を観察したが、中位には礫混じりの厚い堆積土が確認されたことから人為的に埋め戻されている可能性が高い。溝跡底部には砂層が堆積していたことから流水があったと考えられる。E - 6グリッドでは底部から用途は不明であるが、配石が検出されている。

重複関係：7号溝跡より古く、Pit39・40との新旧関係は不明であった。

出土遺物：かわらけや上器擂鉢、火鉢、陶磁器などが出土しており、掲載遺物は24~29である。土器製品は24~26がかわらけで、27は土器擂鉢である。陶磁器では28の大窯第1段階の灰釉端反皿と29の青花皿であり、遺構の年代は16世紀中葉と考えられる。

13号溝跡（遺構：図9 遺物：掲載なし）

位置：C - 6グリッド

検出状況：調査区南側の整地層下で確認された溝跡であり、大部分は調査区南側に展開すると考えられる。検出範囲内では全長約0.7m、幅約0.25mで、深さは約0.25mであった。断片的な確認であったため、時期や性格などは不明である。

重複関係：2号井戸跡より古い。

出土遺物：かわらけが1点のみ出土した。整地層の下であるため、年代的には16世紀中葉と考えられる。

14号溝跡（遺構：図9 遺物：掲載なし）

位置：D - 6グリッド

検出状況：検出範囲内では全長約1.35m、幅約0.35m、確認面からの深さ約0.15mである。当初は9号溝跡の続きではないかと考えられたが、9号溝跡より西側が張出し、深さも急激に深くなることから別遺構として扱った。

重複関係：8・9号溝跡より古い。

出土遺物：なし。

第2節 井戸跡

1号井戸跡（遺構：図11・遺物：図16）

位置：C - 4・D - 4グリッド

検出状況：遺構平面形は円形であり、石組の井戸跡である。規模は石組内径が長軸0.8m、短軸0.7mであり、掘り形の規模は長軸約1.9m、短軸約1.8mである。井戸内には大小の礫が詰め込まれており、人為的に廃棄されたものであると考えられた。礫石を人力で除去しつつ掘削し、深さ約0.8mまで確認したが、それより下層の掘削は幅も狭く、水も湧いたことから困難であった。そのため、本調査後の埋め戻し前に断ち割りを行い、深さ約2.5mまで掘削したところ、下層から竹片が出土した。その深さまで掘削したところで湧き水の水量も多くなつたため、それより下の確認はできなかつたが、井戸枠に用いられた石積みは上から9段目まで検

出した。

重複関係：なし。

出土遺物：かわらけが微量出土している。確認面上で出土した大窯第1段階の天目茶碗1点（30）を掲載している。その他、石積みに角柱状に加工された石材が1点使用されていたため取り上げたが、用途は不明である。遺構の年代は16世紀中葉と考えられる。

2号井戸跡（遺構：図11・遺物：掲載なし）

位置：C - 6 グリッド

検出状況：調査区南側を覆っていた整地層下で確認された。遺構平面形は不整楕円形であり、緩い段切りの斜面部から下段部の地山を掘り抜いた素掘りの井戸跡である。規模は長軸1.8m、短軸1.6mであり、深さは約1.0mまで掘り下げた。井戸内には礫石が投げ込まれており、1号井戸跡と同様人為的に廃棄されたものと考えられる。

重複関係：なし。

出土遺物：掲載遺物はないが、かわらけ、土器擂鉢が微量出土しており、整地層の下であることからも年代は16世紀中葉と考えられる。

3号井戸跡（遺構：図11・遺物：図16）

位置：D - 8、D - 9 グリッド

検出状況：調査区西側の10・11号溝跡に囲まれるような位置で検出されており、遺構平面形は楕円形の石組の井戸跡である。規模は石組内径が長軸0.8m、短軸0.6mであり、掘り形の規模は長軸約1.8m、短軸約1.6mである。深さは礫石が充填されていたこともあり、狭い幅での調査が困難で約0.8mまで人力で掘削した。この井戸跡も他の2基同様内部に礫石が詰め込まれており、最後は人為的に廃棄されたものと考えられる。調査終了時の埋め戻し前に断ち割りを行い、深さ約2.0mまで掘削したが、状況に変化はみられなかった。

重複関係：4号溝跡、3号土坑より古い。

出土遺物：かわらけが微量出土しており、掲載遺物は31のかわらけのみであるが、年代は16世紀中葉と考えられる。

第3節 土坑

1号土坑（遺構：図11・遺物：図16）

位置：E - 8 グリッド

検出状況：遺構平面形は楕円形で、規模は長軸約1.1m、短軸約0.8mである。掘り込みも浅く、覆土に大きな特徴もないことから用途は不明である。

重複関係：なし。

出土遺物：かわらけが3点出土しており、そのうち32のかわらけ1点を掲載している。

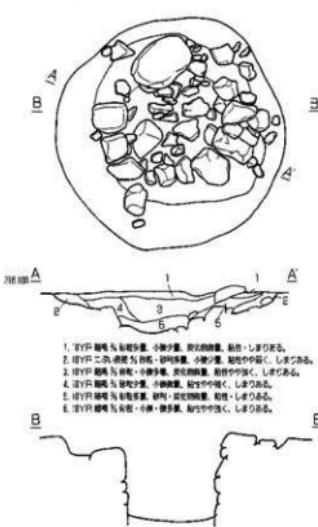
2号土坑（遺構：図11・遺物：なし）

位置：B - 5 グリッド

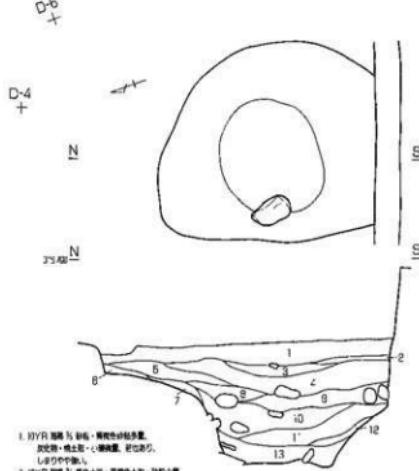
検出状況：遺構平面形は不整形で、規模は長軸約2.0m、短軸約1.82mである。内側からは礫石が検出されたが、配石のように規則的な配置ではなく、用途は不明である。

重複関係：4号溝跡より新しい。

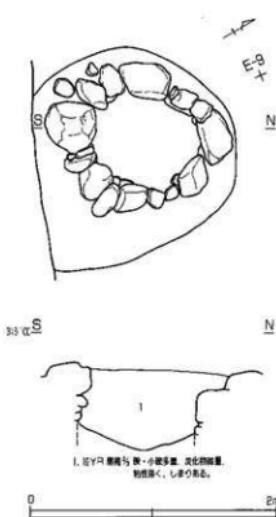
1号井戸跡



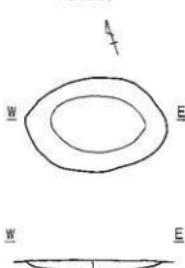
2号井戸跡



3 加井可謙



1号土坑



2号土坑

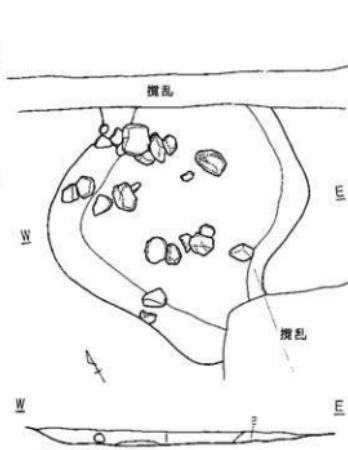


図11 1~3号井戸跡、1・2号土坑遺構図

出土遺物：なし。

3号土坑（遺構：図12・遺物：なし）

位置：D-8、D-9グリッド

検出状況：3号井戸跡と重複する位置にあるため、井戸埋土の一部とも考えられたが、堆積土が比較的新しいと考えられることから別遺構とした。遺構平面形は楕円形であり、長軸約1.18m、短軸約0.92mである。井戸跡の落ち込みを再利用した土坑である可能性があるが、用途は不明である。

重複関係：3号井戸跡より新しい。

出土遺物：なし。

4号土坑（遺構：図12・遺物：掲載なし）

位置：C-5・D-5グリッド

検出状況：遺構平面形は隅丸方形で、規模は長軸約1.4m、短軸約1.3mである。播鉢状に中央へ向って低く掘り込まれていたが、用途は不明である。

重複関係：2号溝跡より新しい。

出土遺物：かわらけが1点のみ出土している。

5号土坑（遺構：図12・遺物：掲載なし）

位置：D-5グリッド

検出状況：北側が搅乱によって失われており、遺構平面形は隅丸長方形か隅丸方形と推測される。規模は残存値で長軸約1.1m、短軸約1.0mである。掘り込みは浅く、底面は平坦であったものの用途は不明である。

重複関係：なし。

出土遺物：かわらけが1点のみ出土している。

6号土坑（遺構：図12・遺物：なし）

位置：E-8グリッド

検出状況：北側が搅乱によって失われており、遺構平面形は円形か楕円形と推測される。規模は残存値で長軸約1.1m、短軸約0.7mである。

重複関係：なし。

出土遺物：なし。

7号土坑（遺構：図12・遺物：掲載なし）

位置：C-6グリッド

検出状況：調査区南側を覆っていた整地層下で確認された土坑であり、南壁際で一部分が検出された。検出範囲内での規模は0.9m、幅約0.3mであった。部分的な調査であったため、全体規模や用途は不明である。

重複関係：なし。

出土遺物：なし。

8号土坑（遺構：図12・遺物：図16）

位置：C-5グリッド

検出状況：一部分が試掘調査時のサブトレーンチによって欠損してしまったが、遺構平面形

は隅丸長方形で、規模は長軸約1.8m、短軸約1.3mである。覆土に炭化物が多く含まれていたが、用途は不明である。

重複関係：2号溝跡より新しい。

出土遺物：掲載した33・34のかわらけ2点が出土しているが、形態的に他のかわらけとやや異なることから、他の一群より新しい可能性がある。年代的には16世紀中葉から後半と考えられる。

9号土坑（遺構：図12・遺物：図16）

位置：D - 6 グリッド

検出状況：遺構平面形は、やや崩れた隅丸長方形で、規模は長軸約1.7m、短軸約1.35mであり、用途は不明である。

重複関係：なし。

出土遺物：出土した遺物は掲載した35のかわらけが1点であり、年代は16世紀中葉と考えられる。

10号土坑（遺構：図12・遺物：図16）

位置：グリッド

検出状況：整地層掘削中にかわらけなどとともに確認された上坑であり、おそらく本来の掘り込みはもう少し上層からであった可能性もある。検出された遺構平面形は円形であり、規模は長軸約0.9m、短軸約0.85mである。用途については、かわらけの出土状況から埋納土坑の可能性もある。

重複関係：なし。

出土遺物：この土坑からは、大小のかわらけや土器擂鉢片が出土している。掲載遺物は、36~42であり、36・38・39のかわらけはほぼ完形であった。土器の年代は16世紀中葉と考えられる。

第4節 建物跡及び柱穴列

掘立柱建物跡、柱穴列については、記載した規模や柱間の数値はすべて中心からの距離で計測している。このほかの柱穴（ピット）は図14にまとめている。

（1）掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（遺構：図13 遺物：なし）

位置：D - 5、E - 5 グリッド

主軸方位：N - 25° - E 柱穴：15・16・27・37号

検出状況：建物北側は調査区外に展開していると考えられ、建物平面形は長方形を呈すと想定され、北から東へ25度傾く。柱穴平面形は円形または不整形であり、16・37号ピットと15・27号ピットの柱間は約3.65m、15・16号ピットと27・37号ピットの柱間は約1.3mを測る。調査区北壁際で検出された14号ピットは軸線延長に位置するため同時に図化しているが、15号ピットとの間隔が狭く、深さも異なることから1号掘立柱建物跡とは異なる遺構と考えられ、建物想定軸線から僅かに外れるが、38号ピットが関係する可能性もある。

また、規模や配列上は同軸線上に配置されているために同一遺構とみなしたが、個々のピットの土層堆積状況をみると、15・27号ピットには柱痕が残り、16・

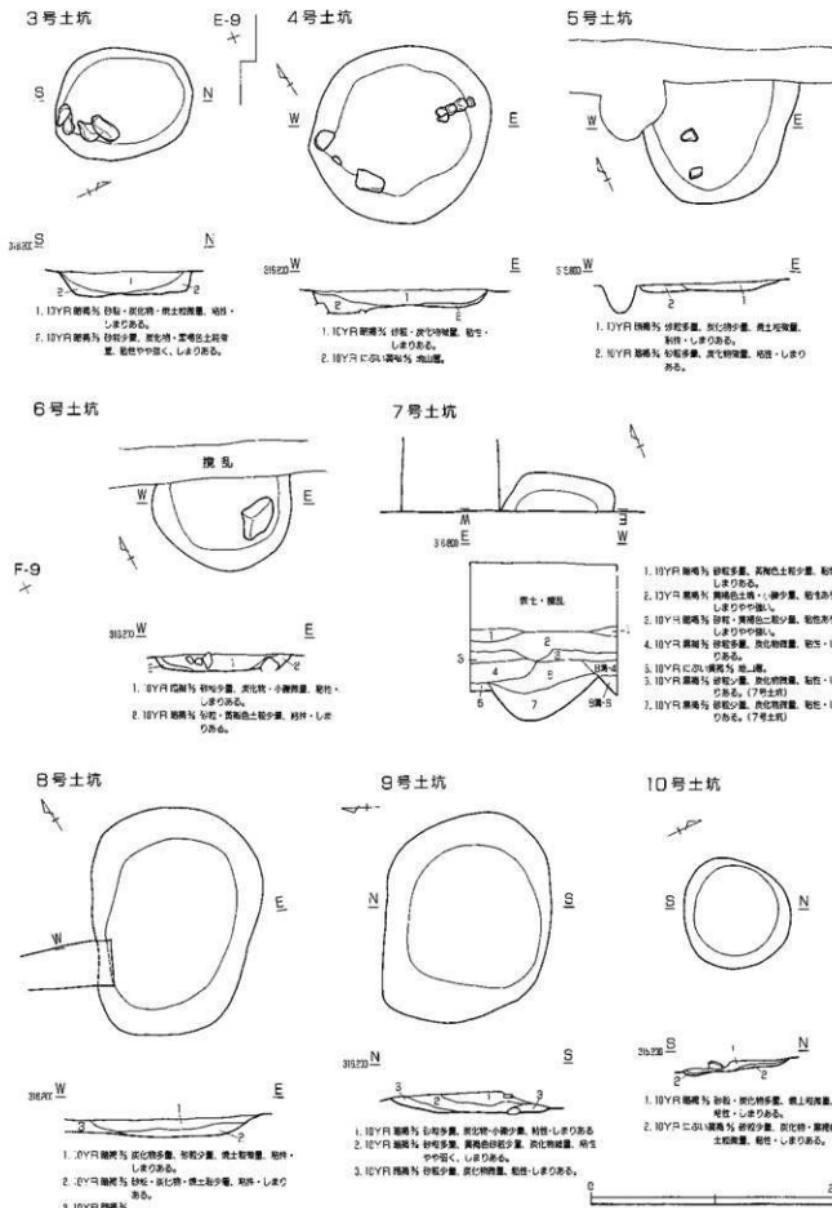


図12 3～10号土坑遺構図

1号挺立柱建物跡

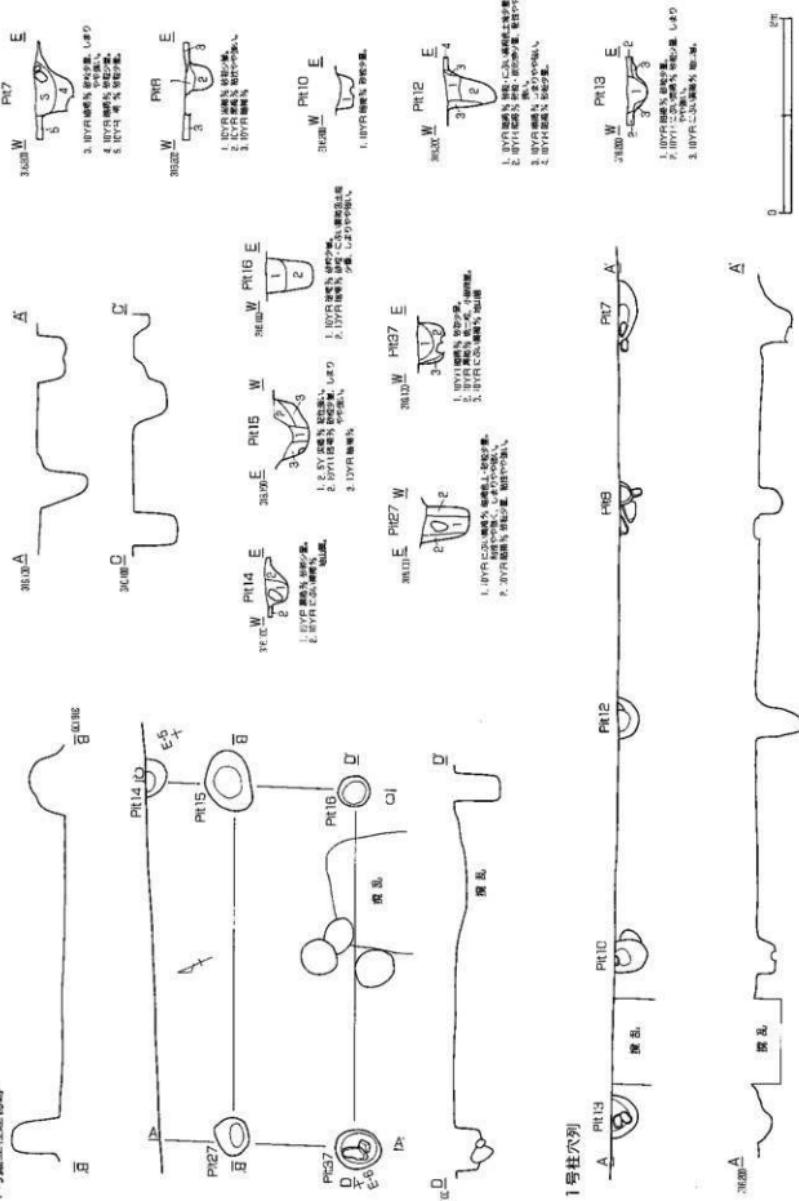


図13 1号掘立柱建物跡・1号柱穴列遺構図

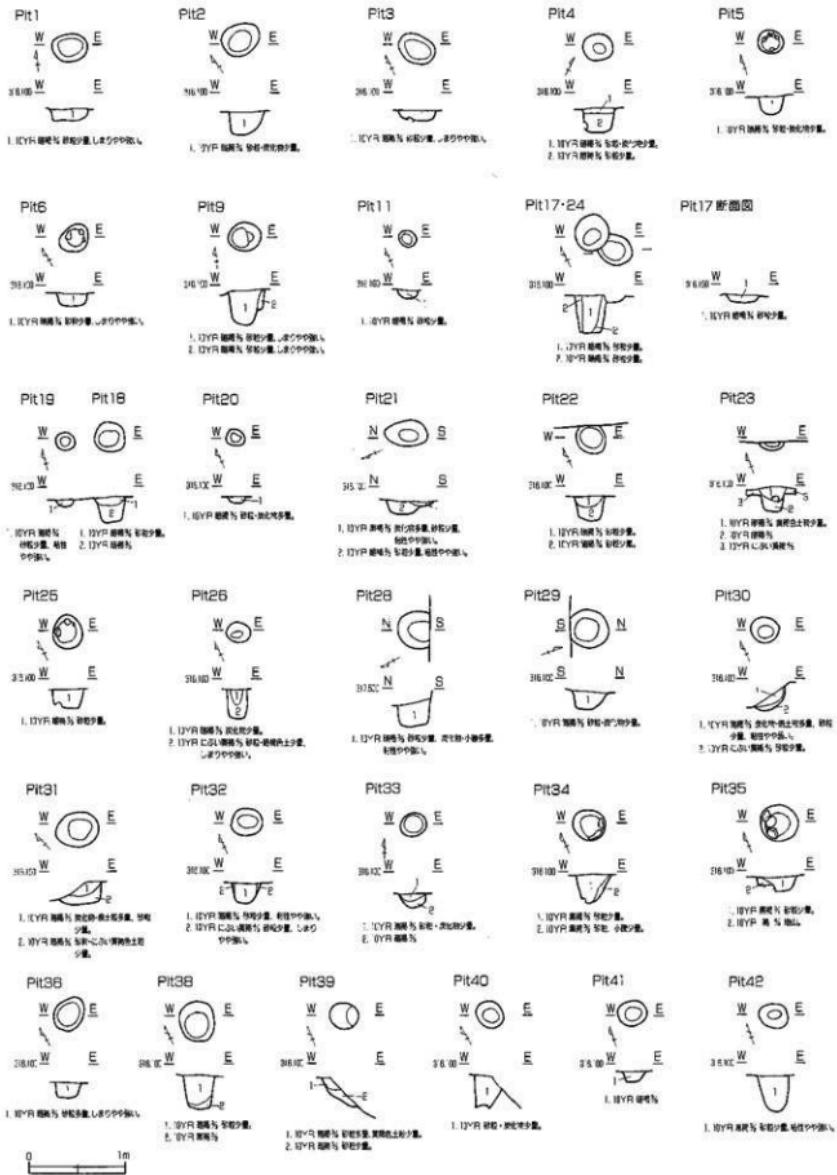


図14 Pit 1～42 造構図

37号ピットは抜き取られている。このような堆積状況の差を考慮すると、別の建物遺構を構成する可能性もある。

重複関係：なし。

出土遺物：なし。

(2) 柱穴列・柱穴

1号柱穴列（遺構：図13 遺物：掲載なし）

位置：D・3・4グリッド

主軸方位：E・20° - S 柱穴：7・8・10・12号

検出状況：調査区北壁で検出されたピット群であったため、全体を確認することができなかったものの、柱穴の規模や配列から判断して掘立柱建物跡の可能性が高いと考えられる。しかしながら、対になる柱穴列を確認していないことから、客観的にみて柱穴列とした。平面形は半面のみの確認であったが、円形または梢円形と推定され、軸線は東から南へ20度傾く。柱間の長さは7・8号ピット間が約1.8m、8・12号ピット間が約2.35m、10・12号ピット間が約2.4mで、全長約6.55mを測る。

重複関係：なし。

出土遺物：各ピットから1点土器が出土しているのみである。

柱穴（遺構：図14）

調査区全体で42基の柱穴が検出されており、全体的に調査区北東側に集中する傾向にある。1号柱穴列のほかにも30・31号柱穴や39・40号柱穴など位置や規模、埋土から判断して同一遺構の可能性があるものも存在する。

第5節 遺構外出土遺物ほか（遺物：図17）

主に調査区南側で確認された整地層内から多くの土器・陶磁器が出土している。かわらけで特徴的なものでは、46の体部外面に墨書が認められた。文字ははっきりとは判読できないが、「圓」ではないかと考えられる。また、50の内底部には指で一定方向に撫で調整を行った痕跡が確認されている。表面観察ではあるが、胎土の様相も他のかわらけとは若干異なるため、別の地域からの搬入か、時代が異なるものではないかと考えられる。このほかには図化されていないものの、轆の羽口が1個体分出土している。54・55並びに各溝跡から出土している熔融物付着土器の存在と合わせて、調査区付近において鍛冶が行われたと考えられる。特に54には金粒の付着が肉眼で確認されることから、金も加工していたと考えられる。

陶磁器では53など大窯第3段階と考えられる新しい時期のものも含まれており、整地による屋敷地の区画や様相の変化を知る上で貴重である。金属製品では63・64のほか、釘などが出土している。

また、掲載できなかつたが、中世城下町に関連する遺物のほかに、縄文時代の土器や石鐵片、古墳時代の甕や高杯片など中世以前の遺物も微量ながら出土したことは、從来不毛と考えられてきた相川扇状地扇央部の状況を知る上での手掛かりになると考える。

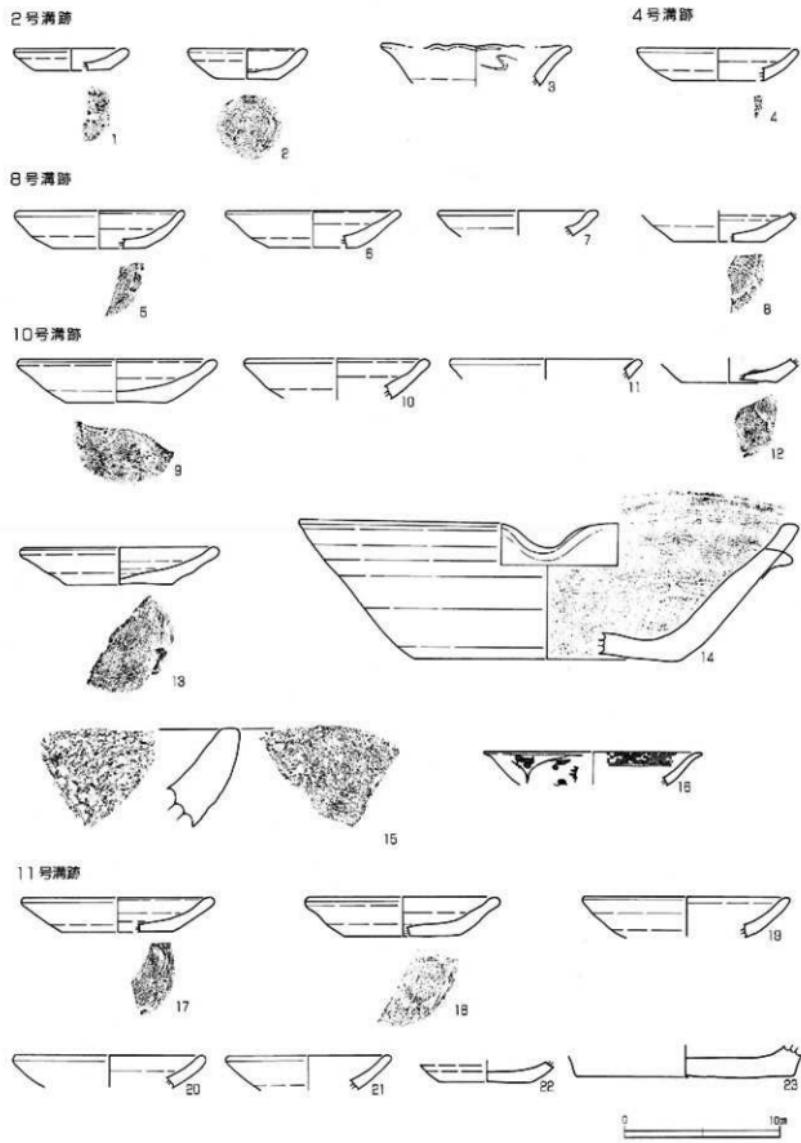
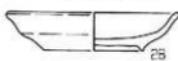
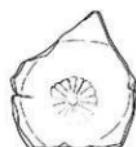


图15 2～11号溝跡出土遺物

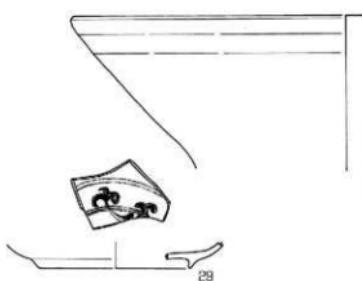
12号溝跡



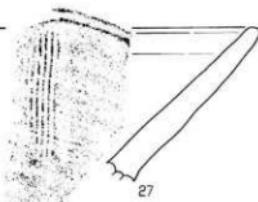
25



26

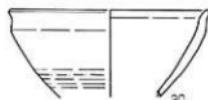


29



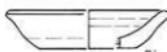
27

1号井戸跡



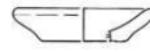
30

3号井戸跡



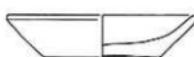
31

1号土坑

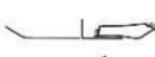


32

8号土坑



33



34

9号土坑



35

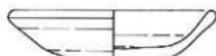
10号土坑



36



37



38



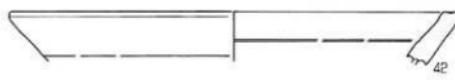
39



40



41

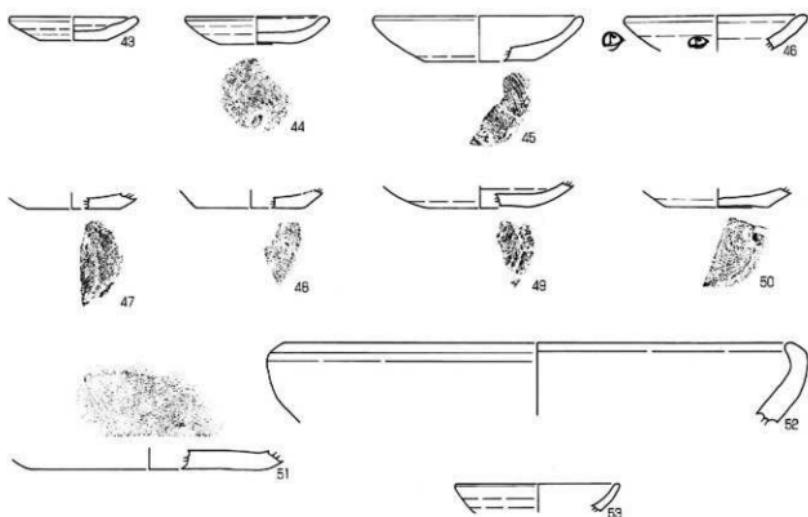


42



図16 12号溝跡、1・3井戸跡、1・8・9・10号土坑出土遺物

整地層



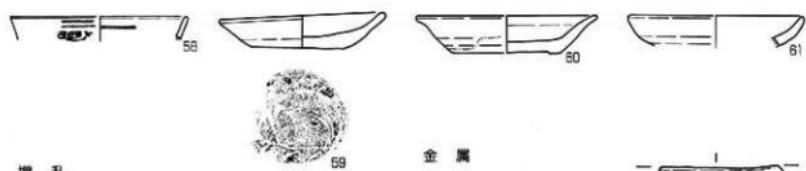
グリッド



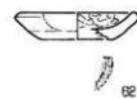
調査区



試掘



攪乱



金屬



0 10cm

0 10cm

図17 整地層・グリッド・調査区等出土遺物

出土遺物観察表

単位: cm ()は反転実測による復元値

図版番号	番号	出土位置・遺構	器種等	生産地等	法 量				色調	焼成	備考
					口径	底径	壁	高			
15	1	B-2 2号溝跡	かわらけ	在地	(7.0)	(5.0)	(1.4)	5YR 鈍い橙 6/4	良		
15	2	B-2 2号溝跡	かわらけ	在地	(7.4)	4.0	1.9	10YR 鈍い黄橙 7/4	良		
15	3	C-4 2号溝跡	青磁綵花皿	中国	(12.0)	-	-	2.5Y 黄灰 6/1	良		
15	4	E-9 4号溝跡	かわらけ	在地	(10.0)	(6.0)	2.1	7.5YR 黒褐 3/1	良	内面煤痕付着	
15	5	D-6 8号溝跡	かわらけ	在地	(10.4)	(6.0)	2.4	7.5YR 鈍い橙 6/4	良		
15	6	E-6 8号溝跡	かわらけ	在地	(10.8)	(5.8)	2.4	5YR 橙 6/6	良		
15	7	D-6 8号溝跡	かわらけ	在地	(10.0)	-	(1.6)	10YR 黄褐 6/2	良	内面熔融物付着	
15	8	E-6 8号溝跡	かわらけ	在地	-	(6.0)	2.0	10YR 黑褐 3/1	良		
15	9	D-5 10号溝跡	かわらけ	在地	(12.4)	(6.5)	2.8	7.5YR 鈍い橙 7/4	良		
15	10	D-8 10号溝跡	かわらけ	在地	(11.4)	-	-	7.5YR 鈍い褐 5/4	良		
15	11	E-7 10号溝跡	かわらけ	在地	(12.0)	-	-	10YR 褐灰 5/1	良	内面熔融物付着	
15	12	E-7 10号溝跡	かわらけ	在地	-	(6.0)	-	10YR 褐灰 6/1	良	内面熔融物付着	
15	13	D-8 10号溝跡	かわらけ	在地	(12.0)	(7.0)	2.4	7.5YR 鈍い橙 6/4	良		
15	14	D-8 10・11号溝跡	擂鉢	在地	(31.8)	(17.0)	(8.7)	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	片口	
15	15	D-8 10号溝跡	石鉢	在地	-	-	-	5Y 灰 5/1		玄武岩 重量116g	
15	16	D-8 10号溝跡	青花端反皿	中国	(14.0)	-	-	N 灰白 8/0	良		
15	17	E-8 11号溝跡	かわらけ	在地	(12.0)	(7.0)	2.2	7.5YR 鈍い橙 7/4	良		
15	18	E-8 11号溝跡	かわらけ	在地	(12.0)	(7.4)	2.5	7.5YR 鈍い橙 6/4	良		
15	19	E-8 11号溝跡	かわらけ	在地	(13.0)	-	-	5YR 橙 7/6	良		
15	20	E-8 11号溝跡	かわらけ	在地	(12.0)	-	-	5YR 橙 6/6	良		
15	21	E-8 11号溝跡	かわらけ	在地	(10.0)	-	-	5YR 橙 6/6	良		
15	22	E-8 11号溝跡	かわらけ	在地	-	(6.0)	-	5YR 橙 6/6	良		
15	23	E-8 11号溝跡	擂鉢	在地	-	(14.0)	-	7.5YR 鈍い褐 6/3	良		
16	24	D-7 12号溝跡	かわらけ	在地	(9.0)	(4.8)	(2.0)	5YR 橙 6/6	良		
16	25	D-7 12号溝跡	かわらけ	在地	(12.0)	-	-	7.5YR 橙 6/6	良		
16	26	D-6 12号溝跡	かわらけ	在地	(7.0)	-	-	5YR 明赤褐 5/6	良		
16	27	D-7 12号溝跡	擂鉢	在地	(33.0)	-	-	10YR 鈍い黄褐 5/3	良		
16	28	D-7 12号溝跡	灰釉端反皿	瀬戸美濃	(10.4)	6.0	2.3	2.5Y 灰黄 7/2	良	貴入 輪積底 印花	
16	29	D-7 12号溝跡	青花皿	中国	-	9.0	-	N 灰白 8/0	良		
16	30	C-4 1号井戸跡	天目茶碗	瀬戸美濃	(12.0)	-	-	2.5Y 黄灰 7/2	良		
16	31	D-8 3号井戸跡	かわらけ	在地	(9.0)	(6.0)	2.3	7.5YR 鈍い橙 6/4	良		
16	32	E-8 1号土坑	かわらけ	在地	(8.0)	(5.0)	2.0	10YR 鈍い黄橙 6/4	良		

出土遺物観察表

単位: cm ()は反転実測による復元値

図版 番号	番号	出土位置・遺構	器種	产地	法 径			量 高	色調	焼成	備考
					内 径	底 径	器 高				
16	33	C-5 8号土坑	かわらけ	在地	(11.4)	(7.0)	2.6	10YR 鈍い黄橙 6/4	良		
16	34	C 5 8号土坑	かわらけ	在地	-	(7.0)	-	7.5YR 鈍い橙 7/4	良		
16	35	D 6 9号土坑	かわらけ	在地	-	(5.4)	-	10YR 鈍い黄橙 7/4	良		
16	36	C-4 10号土坑	かわらけ	在地	7.0	4.0	1.8	5YR 橙 6/6	良		
16	37	C-4 10号土坑	かわらけ	在地	(12.0)	6.2	2.4	5YR 橙 6/6	良		
16	38	C-4 10号土坑	かわらけ	在地	12.0	5.5	3.2	7.5YR 鈍い橙 6/4	良		
16	39	C-4 10号土坑	かわらけ	在地	12.2	5.8	2.9	5YR 橙 6/6	良		
16	40	C-4 10号土坑	かわらけ	在地	(6.4)	(4.0)	1.5	5YR 鈍い橙 6/4	良		
16	41	C-4 10号土坑	かわらけ	在地	(6.0)	(4.0)	1.5	5YR 橙 6/6	良		
16	42	C-4 10号土坑	擂鉢	在地	(27.0)	-	-	10R 赤 5/6	良		
17	43	C-7 整地層	かわらけ	在地	(7.8)	(4.2)	1.6	7.5YR 明褐色 5/6	良		
17	44	D-7 整地層	かわらけ	在地	(8.8)	(4.8)	1.8	5YR 橙 6/6	良		
17	45	C-4 整地層	かわらけ	在地	(13.0)	(7.0)	2.9	5YR 橙 6/6	良		
17	46	C-5 整地層	かわらけ	在地	(11.2)	-	-	5YR 橙 7/6	良	黒墨あり	
17	47	B-4 整地層	かわらけ	在地	-	(6.0)	-	5YR 橙 6/6	良		
17	48	B 5 整地層	かわらけ	在地	-	(7.0)	-	7.5YR 鈍い橙 6/4	良		
17	49	B 5 整地層	かわらけ	在地	-	(6.4)	-	7.5YR 鈍い橙 7/4	良		
17	50	C 4 整地層	かわらけ	在地	-	(6.4)	-	5YR 鈍い橙 7/4	良		
17	51	C 5 整地層	擂鉢	在地	-	(15.0)	-	7.5YR 鈍い褐 5/4	良		
17	52	C 5 整地層	火鉢	在地	(32.0)	-	-	5YR 橙 6/6	良		
17	53	C 6 整地層	鉄釉丸皿	瀬戸美濃	(10.2)	-	-	2.5Y 灰黄 6/2	良		
17	54	D 9 グリッド	かわらけ	在地	(8.0)	(5.0)	(1.9)	10YR 極灰 6/1	良	内面熔融物付着(金粒)	
17	55	D 6 グリッド	かわらけ	在地	(9.6)	(7.0)	(2.0)	10YR 極灰 6/1	良	内面熔融物付着	
17	56	調査区一括	かわらけ	在地	(10.0)	(6.4)	2.2	7.5YR 鈍い橙 7/3	良		
17	57	調査区一括	天目茶碗	瀬戸美濃	(12.0)	-	-	5YR 極暗赤褐 2/3	良		
17	58	調査区一括	青花碗	中国	(11.0)	-	-	N 灰白 8/0	良		
17	59	試掘調査	かわらけ	在地	(11.4)	5.8	2.0	7.5YR 鈍い橙 6/4	良		
17	60	試掘調査	鉄釉端反皿	瀬戸美濃	(11.2)	(6.8)	2.4	5Y 灰白 7/1	良		
17	61	試掘調査	灰釉皿	瀬戸美濃	11.6	-	-	10YR 鈍い黄橙 7/2	良		
17	62	E-7 搅乱	かわらけ	在地	(9.0)	(4.6)	1.7	7.5YR 黒褐 3/1	良		
17	63	試掘調査	古鏡	不明	往 2.5	厚さ 0.15	重さ(g) 2.4				
17	64	C 6 整地層	銅製品	不明	長さ 5.1	幅 1.5	重さ(g) 8.9				

第4章 考 察

第1節 武田城下町遺跡の出土遺物の様相

出土遺物は、調査面積に比して少量であり、かわらけを主体とした土器類が多くを占める。数量は接合したものは1点として数えているが、かわらけ316点、土器擂鉢37点、火鉢28点、内耳鍋4点、瓦質土器1点であり、土器製品の総点数は386点であった。かわらけはすべて口クロ成形であり、主体を占めるのは厚手橙色系のかわらけであった。形態的には10・11号溝跡にみられる体部に大きな稜が形成され、直線的に立ち上がるもの（9・13・18タイプ）と、10号土坑にみられるやや内湾するもの（37～39）に分けられる。いずれも現時点での山梨県内における土器編年では、武田期に該当する16世紀第2四半期から第3四半期に位置付けられる。

その他には、全体的に器壁が薄く、底部から口縁部まで直線的に立ち上がる薄手黄橙色系のかわらけが出土している。この一群は武田氏館跡や武田城下町遺跡の中でも、館跡近接地や近世城下町との重複地域で確認されることから、16世紀第4四半期から17世紀初頭と考えられているが、本地点では出土数量が少ない。このことは、本地点における城下町の存続年代を考える上で極めて重要であり、再確認してみる。

本県において戦国末期の遺物の年代観を考える上で定點となるのは、天正9年（1581）～天正10年（1582）までの約1年間に使用期間が限定される新府城跡出土資料がある。武田勝頼が新たな本拠として築いた新府城は、武田氏滅亡後も徳川氏が対北条氏のための本陣として使用しているのみであり、発掘調査によって出土したかわらけは、多くが薄手黄橙色系のかわらけである。同かわらけは武田氏館跡においても16世紀末の武田氏滅亡後の遺構群に共作するとともに、甲府城跡の初期の遺構に伴うことはほぼ確実であり、少なくとも天正後半～慶長年間までの存続期間が設定できる。初現については、厚手タイプから薄手タイプへの転換が武田氏段階か徳川氏段階であるか現時点で断定することはできないが、天正9・10年段階で使用されていたことは、新府城跡の事例からも明らかである。そのため、かわらけの年代観から想定される本地点の城下町は、それ以前の16世紀第2～3四半期にピークを迎え、それ以降急速に衰退したことになる。

陶磁器については、調査区全体でも数量は少なく、中国陶磁器は白磁皿1点と青花皿5点、碗2点、青磁稜花皿2点で、総点数は10点であった。中国陶磁器で年代がわかるものでは、図示したもののはかに小野編年の皿C群、碗C群が各1点出土しているが、16世紀後半の万暦様式や漳州窯系の製品はみられない。国産陶器は灰釉皿3点、鉄釉皿2点、天目茶碗5点で点総点数10点のうち、瀬戸美濃大窯第1・2段階の製品が5点、大窯第3段階の製品が2点不明3点であった。

本地点から出土した陶磁器の特徴は、いわゆる威信財と呼ばれる青磁の大型製品がなく、すべて碗皿を主体とする日常生活で使用する器であったことである。国産陶器も瀬戸美濃製品や常滑製品も含めて壺、甕、鉢の大型製品が皆無であり、城下町におけるこれまでの調査成果をみても特異な組成を示している。ただし、擂鉢に関して言えば、在地の土器擂鉢が多数出土していることから、在地土器が瀬戸美濃製品を補完していたと考えられる。

このような土器製品主体の器種組成は、16世紀代の遺跡の中でも寺院と想定されている二本柳遺跡や村落遺跡と考えられる本郷B遺跡などに近い様相であり、本地点の居住者の階層を考える上でも興味深い。

第2節 武田城下町遺跡の遺構変遷

本地点の様相をみると、遺構はそれほど過密に分布してはいない。遺構の重複関係をみても、中世段階で最低2時期の変遷があり、遺物の年代からも16世紀中葉までに出現して後半のうちに消滅に向かうと考えられるが、調査区内の遺構の様相から全体を整理し、もう少し詳しく分析してみることとする。

まず、調査区内では南北方向の中央付近を境に土層堆積状況に変化がみられた。試掘調査を実施していた南側では、近世以降の造成層下層は、炭化物などを含む暗褐色土層を基本とし、所々黄褐色や黒褐色の斑な土層堆積が確認された。調査の進展によって、これらの土層は中世段階の整地層である可能性が高いことが判明し、整地層下から井戸跡や土坑など16世紀段階の遺構群が検出されている。

反対に調査区北側については、包含層や整地層などが確認されず、近世以降の土層除去後すぐに地山が検出された。このような結果は、戦国時代の北側の生活面が南側と比べて高かったことを示していると思われる。よって、戦国時代には調査区内に緩い段差を設けた南北2区画の屋敷地が形成されていた時期があったと考えられる（図18）。

また、調査区中央から西側にかけて南北方向に8・12・10号溝跡が検出されており、これらの溝跡も戦国時代の屋敷地を区画するための溝であった可能性が高い。それぞれの並行関係を出土遺物からは判断することは難しいが、少なくとも位置や重複関係からみて10号溝跡と8号溝跡が同時存在した可能性が高いと考えられる。10号溝跡には西から11号溝跡が接続することから、この段階では10号溝跡西側は11号溝跡によって南北2区画に分割されるとともに、8号溝跡東側は2号溝跡、あるいは南北の緩斜面によって2区画に分割されていたと考えられ、最大で4区画の屋敷地が成立していたと想定される。井戸跡の分布も概ね各区画に配置されていることとも可能であり、それぞれに生活空間が営まれていたのではないだろうか。

その後、8号溝跡東側のうち南側は盛土造成を受け、12号溝跡を境として全体が大きな2つの区画として整理され、4号・8号などの土坑群が営まれると考えられる。その際、北側に位置する1号掘立柱建物跡やピット群がどの段階の区画とどのような組み合わせになるかは、今回の調査では検証することはできなかった。いずれにしても、全体的に屋敷地の区画は、現在の土地区画の基軸と符合している部分が多いことから、基軸は戦国時代にさかのぼる可能性が高いと考えられる。

参考文献

- 飯沼賢司 1985 「戦国期の都市“甲府”」『甲府市史研究』第2号 甲府市市史編纂委員会
小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2
日本貿易陶磁研究会
甲府市教育委員会 2000 『史跡武田氏館跡VI』
甲府市教育委員会 2001 『武田城下町遺跡I』
甲府市教育委員会 2001 『甲府城下町遺跡II』
甲府市教育委員会 2003 『史跡武田氏館跡XI』
甲府市教育委員会 2004 『本郷B遺跡』
韮崎市教育委員会 2000 『史跡新府城跡』
山梨県教育委員会 1992 『二本柳遺跡』

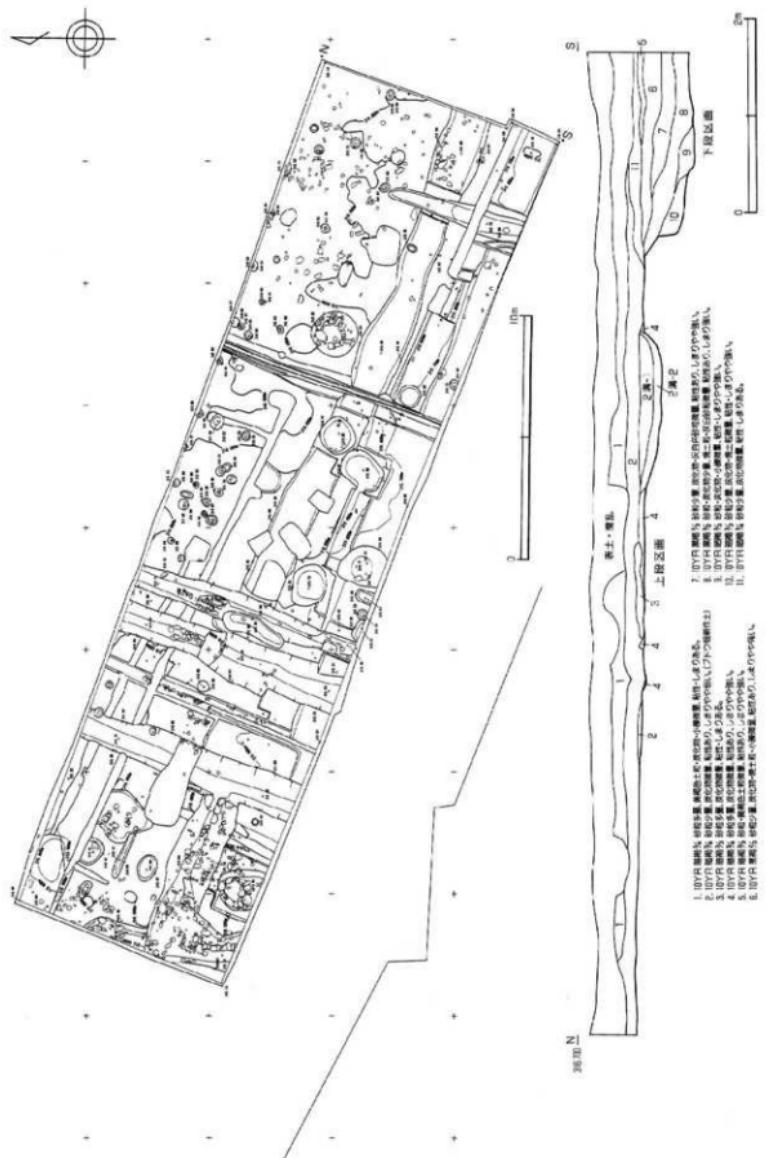


圖18 全體地形圖

第5章 結語

平成10年9月29日付け、府保記第75号「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について（通知）」において、埋蔵文化財として取り扱うべき範囲が中世遺跡までを原則として対象とする指針が示された。通知を受け、本市においても平成11年度から武田氏館を中心として発展した中世城下町を新たに周知の埋蔵文化財包蔵地と認定し、武田城下町遺跡として発掘調査を開始している。

しかしながら、武田城下町遺跡の包蔵地範囲の多くはすでに宅地化が進んでおり、届出による発掘調査の多くは、個人住宅の建替え等に伴う小規模な試掘調査が主体であった。したがって、小規模調査の断片的な成果を基に城下町の復元を試みざるを得なかつたが、導き出される情報には限界があった。したがって、本地点の調査は武田城下町遺跡として一定面積を発掘調査した事例としては3例目であり、城下町の構造と変遷を知る上で大きな成果を上げることができた。

調査された遺構の様相をみていくと、幅1m前後の溝跡が近接した位置で南北方向に3条検出されている。規模も大きいことから溝跡を境界とする屋敷地が溝を挟んだ東西に存在していたと考えられる。東西の屋敷地は、緩い段切りと溝跡によって南北に区画されており、調査区全体で4区画あるいは3区画が存在したのではないかと考えられ、城下町の屋敷構造と造成方法が明らかになったことは今までにない成果であった。

屋敷内の建物配置など細部の構造に関しては、調査範囲が限定的であるため詳細な様相を述べることはできない。そのうち、最も大きな調査面積を有する北東の区画においては、1棟の掘立柱建物跡と柱穴列が確認されるとともに、石組の井戸跡が区画の外れに設けられていたことから、この付近が屋敷の裏手となる可能性もある。

また、10・11号溝跡は、最下層に流水による砂層が形成されており、その後焼土塊や炭化物を多量に含む土層が流れ込んでいた。天文12年（1543）に武田氏館跡に近い城下町で火災が発生したことが記録されており、その際の火災処理の可能性もあるが、調査区内では包含層や他遺構から火災の痕跡は検出されていない。そのため、現時点では熔融物付着土器の存在から鋳型や鍛冶炉などの解体や屋敷の竈の解体に伴う限定的な廃棄物層と捉えたいが、周辺における調査成果と合わせて広く判断する必要があり、早急な結論は避けることとする。

出土遺物に関しては、調査区全体でも山土量は少なく、耐久性の差もあるだろうが土器製品の割合が高い。特徴としては、かわらけが9割以上を占め、その多くが16世紀第2・3四半期の厚手のかわらけであり、後続する時期に位置付けられる薄手のものはみられないことから、城下町の年代観を考える上で興味深い。加えて、全体的に陶磁器の出土量が少なく、高級陶磁器である青磁の大型製品は出土していない。擂鉢には瀬戸美濃製品が多く、ほぼ在地の土器擂鉢で占められていることは、居住者の階層を知る上で一つの指標となるのではなかろうか。

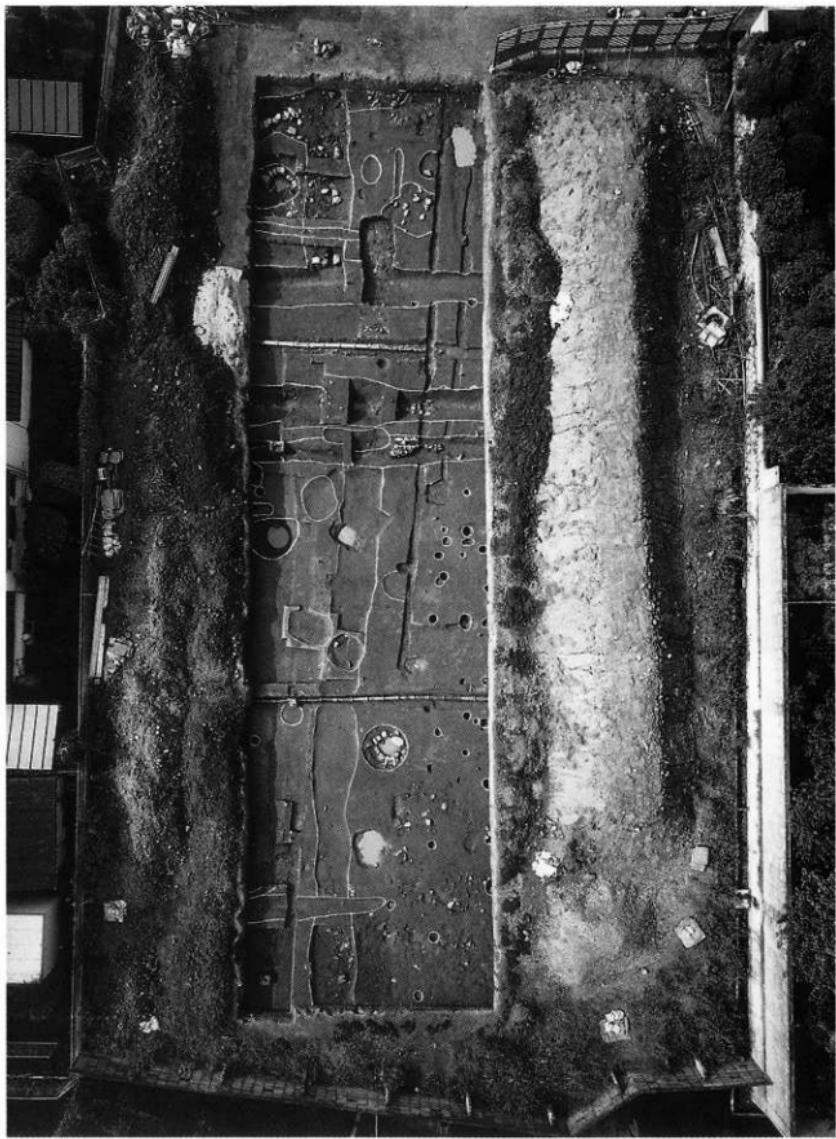
本地点は、城下町に設定されたとみられる南北基軸街路に挟まれた区域の中で最も奥まった場所に位置しているものの、16世紀段階の屋敷地が複数確認されたことは興味深い。『高白斎記』によると、天文17年（1548）には府中における田畠、新屋敷を造ることを禁じる触が出されている。このことは、城下町の急速な拡大を示すものと評価されているが、本地点における調査成果は、16世紀中葉における城下町の展開を裏付ける資料であり、今後周辺地点における発掘調査資料の蓄積と分析に期待したい。



調査区遠景(南～)



調査区遠景(北～)



武田城下町遺跡(大手一丁目地点)全景



調査区近景(西~)



調査区近景(東~)



1号溝跡断面



2号溝跡断面



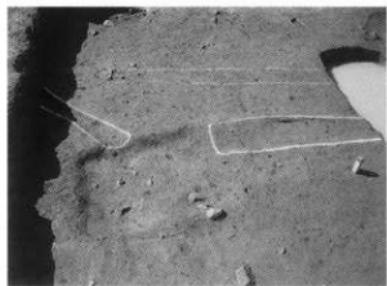
1号溝跡検出状況



2号溝跡完掘(西～)



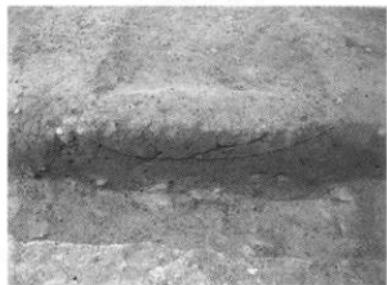
2号溝跡完掘(東～)



3号溝跡完掘



4号溝跡完掘



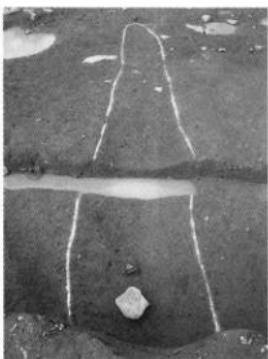
6号溝跡断面



7号溝跡断面



5号溝跡完掘



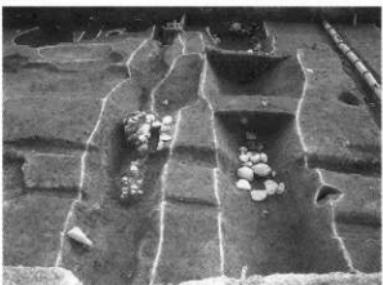
6号溝跡完掘



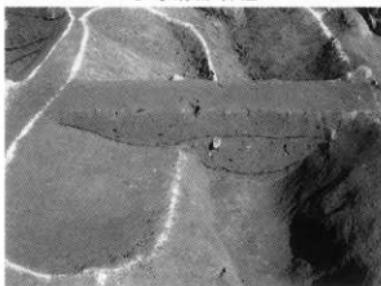
7号溝跡完掘



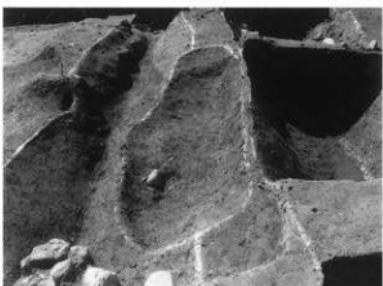
9号溝跡石組



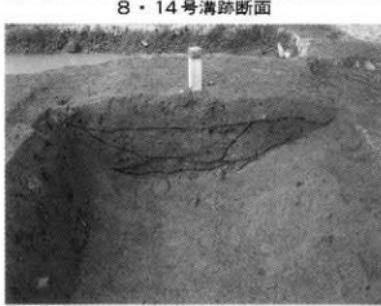
8·9·12·14号溝跡完掘



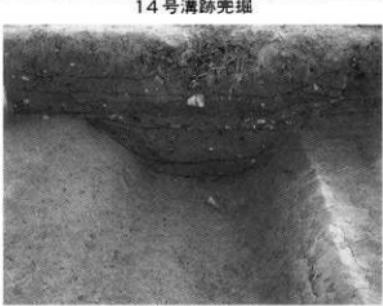
8·14号溝跡断面



14号溝跡完掘



10号溝跡断面



10号溝跡断面



10号溝跡完掘(南～)



10号溝跡完掘(北～)



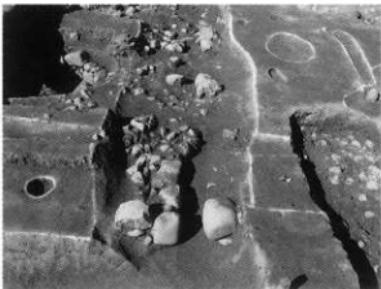
11号溝跡断面



11号溝跡断面



11号溝跡完掘(西～)



11号溝跡完掘(東～)



11号溝跡石組



12号溝跡断面



12号溝跡断面



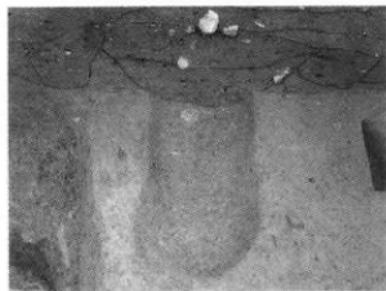
12号溝跡断面



12号溝跡床面配石



12号溝跡完掘



13号溝跡完掘



1号井戸跡断面



1号井戸跡完掘



1号井戸跡石組



2号井戸跡断面



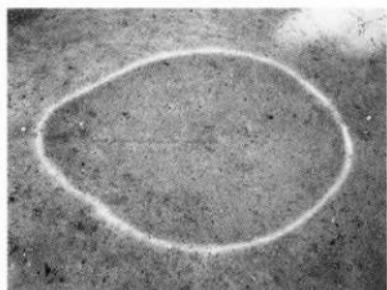
2号井戸跡完掘



3号井戸跡断面



3号井戸跡完掘



1号土坑完掘



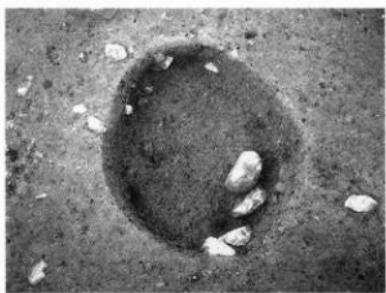
2号土坑断面



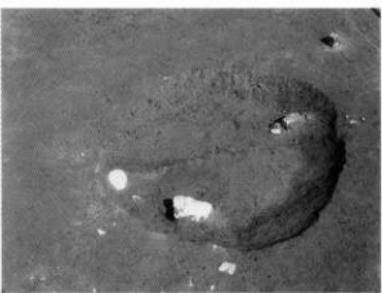
2号土坑完掘



3号土坑断面



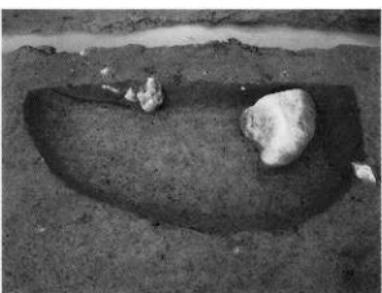
3号土坑完掘



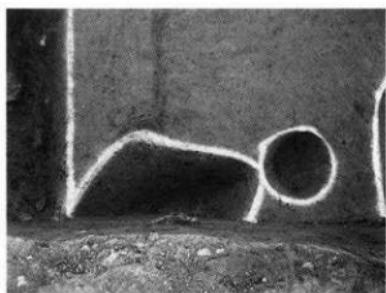
4号土坑完掘



5号土坑完掘



6号土坑检出·断面



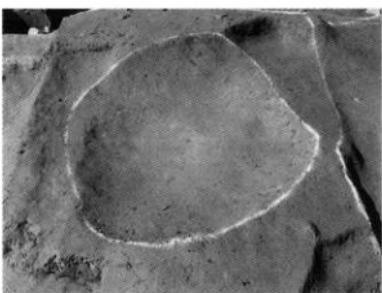
7号土坑完掘



8号土坑完掘



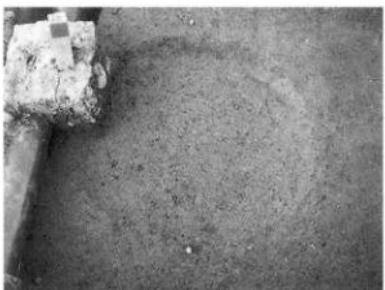
9号土坑断面



9号土坑完掘



10号土坑かわらけ出土状況



10号土坑完掘



1号柱立柱建物跡



1号柱穴列及び周辺



発掘調査前



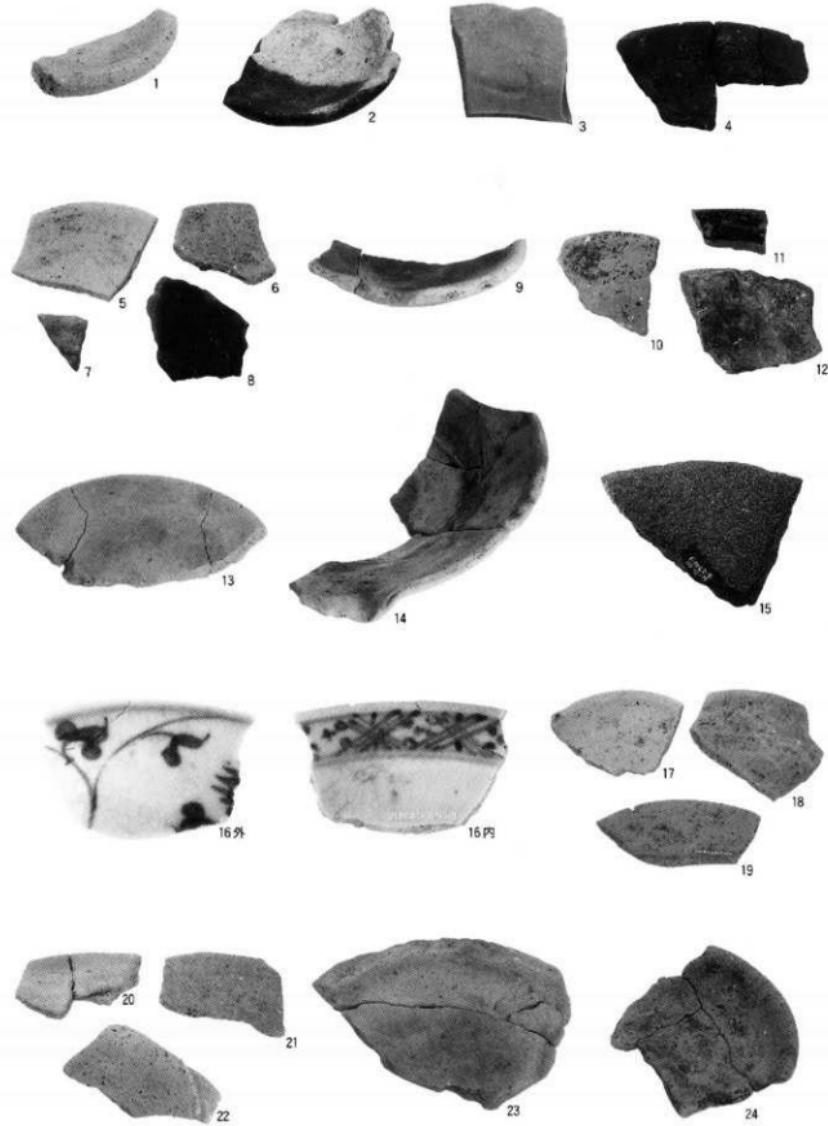
発掘調査後

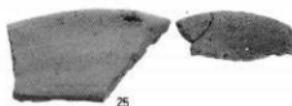


作業風景



作業風景





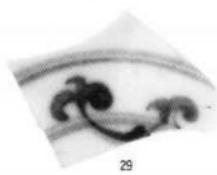
26



27



28



29

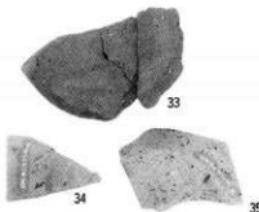


30



31

32



33

36



34

35



37



38



39



40

41



42

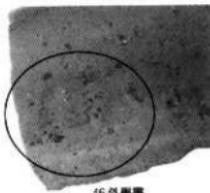


43

44

45





46 外表面



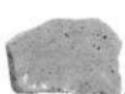
47



48



49



50



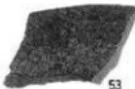
51



49 内表面



52



53



54



55



56



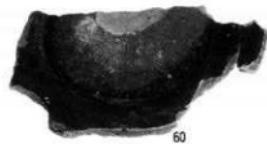
57



58



59



60



61



62



63



64

報告書抄録

ふりがな	たけだじょうかまちいせき						
書名	武田城下町遺跡Ⅲ						
副書名	国立大学法人山梨大学職員寮建設工事に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	甲府市文化財調査報告						
シリーズ番号	43						
編集機関	甲府市教育委員会						
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号 電話055(223)7324						
発行年月日	平成21年3月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
たけだじょうかまち 武田城下町 いせき 遺跡	やまとしけんこうし 山梨県甲府市 かわていっちょうめ 大手一丁目 4314	19201	252	35° 40' 14"	138° 33' 20"	20080902 ~ 20081030	職員寮建設 工事に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
武田城下町 遺跡	城下町	中世	溝跡・掘立柱建物跡・ 井戸跡・土坑・柱穴	かわらけ・陶磁器・ 古鏡・釘・石柱			

甲府市文化財調査報告 43

武田城下町遺跡Ⅲ

— 国立大学法人山梨大学職員寮建設工事に伴う発掘調査報告書 —

平成21年3月27日

発行 国立大学法人山梨大学・甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号

TEL 055(223)7324

FAX 055(226)4889

印刷 藤内田印刷所

〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18

平成20年度 武田城下町遺跡

遺構平面図

